

の歌が勅選集を賑した佳作であつたことを思出したでもあらうか。

武家の新都鎌倉は近い。日の出のこの新市街に、彼れのみすばらしい姿が訪れた時、其の名に似ぬ面貌を驚いたであらう。

頼朝に面調の光榮に浴して銀の猫を賜はり、退下して門前の小僧に其れを呉れてやつた云ふ逸話はこの時のことでもあつたらうか。

鎌倉をたつて、渺茫として涯知らぬ武藏野を横切り、其の北の端下野に入り那須野を別ける。

都近き小野大原を思ひ出づる柴の煙のあはれなるかな。

行けども〜つきぬ草の原には今柴焼の煙が立つてゐる。洛北の大原の柴焼が思ひ出だされて、彼れはいかに都のことを此の遠き遙かな地に思出でたことであらう。

山高み岩ねをしむる柴の戸にしばしもさらば世をのがればや。

那須の山に山寺を訪ふて、この廣き高原を見はるかす庵住を戀しく思ふたのであらうか。

山を越ゆれば名にし負ふ白河の關である。こゝまで来れば彼れもやつと其の目的を果したやうな、しかも久しく目指した東奥のエルサレムの風光にはじめて接し得る悦びに浸ることが出来た。

心を改めて、古人がしたやうに衣冠を正してこの聖地に入る光榮を魂に染めて、歌魂の沸々と胸に溢れるのを覺えた。

恰度月もことに心なしか、面白く照してゐた。且て能因法師がこゝに来て、都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。

と詠んだのは何日だつたかなと思出だされて餘りに名残が惜まれたので、宿の柱に、
白川の關屋を月のもる影は人のこゝろをとむるなりけり。

と月の面白さを歌にして見るのであつたが、都を出で、この方多く過去つた日數を
數へて見ると、能因の歌が決して誇張でないことが思はれて來る。

あの逢坂を越えてから幾山河をいく日つゞけて來たことであらうか。怖ろしい月日
が經つて居る。

都出で、あふ坂越えし折までは心かすめし白河の關。

蒼茫として空の彼方に考へ心のうちに微に掠めてゐた此の白河の關が、もの厚い霞
の幕を切放つて唯今我眼に映つてゐるのである。眼を放てば山々が其の向うに重なつ
てゐる。それは彼れが夢寐にも忘れなかつた歌の淨土の山々ではないか。彼れの心は

もううつとりとしてゆくのであつた。

白川を出で、一路北をさしてゆく、阿武隈川の流れを渡つて信夫の里に出る。信夫
と云ふ名の何とセンチメンタルなことよ。古への歌人たちはこの名によつてこの里を
いかにゆかしく眺めたであらうか。信夫文字摺たれゆるにと我が淋しい旅心を自ら顧
みるのであつた。

秋は深くなつてとある社には紅葉がしてゐる。

ときはなる松の緑も神さびて紅葉ぞ秋はあけの玉垣。

こゝから二日路の旅を重ねるとおもはくの橋がある。こゝにも橋を埋めるばかり紅
葉が散つてゐる。渡り悪いので人に尋ねるとおもはくの橋と云ふ。

ふまゝうき紅葉の錦散りしきて人も通はぬおもはくの橋。

と即興の歌をもものして、笠島に名歌人實方の墓を弔つた。野中に少し立派な墓があるのに気がついて問ふて見れば中將の墓と云ふ。何中將かと反問すれば實方と云ふのであつた。

あの名門の出の名歌人の最後を飾るものとしては餘りにも寂し過ぎるのであつた。折も折霜がれの薄の穂が遠く見渡されて云ひ様のない悲しさを覺えた。

朽ちもせぬ其名ばかりをとどめ置きて枯野の薄かたみにぞ見る。

薄が實方の爲めに僅に残された形見であつた。

武隈の松にゆく。この松が陸奥行脚の歌人には忘れられぬものであつた。その松に綴られた哀れな物語りがいつもひどく歌人騷客の心を捉へるのであつた。且て能因がこゝに來た時でさへ松は跡方もなくなつてゐた。

西行は武隈の里に辿りついて、

枯れにける松なき宿のたけくまはみきと云ひてもかひなかるべし。

と跡なき松に古へを想ふのであつた。

歌枕名取川を渡つて宮城野に歩を向けると、川岸には紅葉が美しく川を染めて遠く

つゞいてゐた。

なとり川きしの紅葉のうつる影は同じ錦を底にさへ敷く。

紅葉は美しかつたけれど、萩のゆかしい花はとつくの遠に散つて、其木さへ枯々にすがれてゐた。たゞ荒涼たる宮城野であつた。けれど其の路傍には多賀城の壺の碑が立つてゐる。

みちのくの奥ゆかしくぞおもほゆる壺のいしぶみそとの濱風。

とこの石碑にわづかに荒涼たる心を慰むことが出来た。
やがて鹽釜に出る。

北上川のほとりに数々の名所を訪ねつゝ、やつと十月十二日に平泉に到着すること
が出来た。冷たい冬の嵐が吹捲くつてゐた。衣川が見たい心にせかれて旅装も解かず
嵐をついて衣川の城を見下して、

とりわきて心もしみてさえぞ渡る衣川見にきたる今日しも、

氷が汀を閉ぢてことに淋しかった。

平泉は奥羽の藤原氏が富を傾けて築いた都であつた。遠く平安の都を模して、この
僻地には目も醒めるやうな都城の美があつた。久しく東北の富を擅にしてゐた藤原
氏が其の財を惜まず振舞ふ生活は今の都には見られない豪華なものであつた。

西行は同族の誼と、更に一介の旅僧とは云へ天下に名立たる歌人であることによつ
て、並々ならぬ優遇をこゝに蒙ることが出来た。

そのうちにこの年も暮れてゆく。

常よりも心ほそくぞおもほゆる旅の空にて年の暮れぬる。

いかな待遇も彼れにはやはり年の暮れは淋しかった。ことにこの北のはてに身に泌
みる冬の寒さは、都近くを離れ得なかつた彼れには堪えられぬものがあつた。

中尊寺には罪を蒙つた奈良の僧が澤山来て居て、過去の罪業を悔ひてゐるのであつ
た。彼れは時々彼等と都の話をしては身に抓されて都戀しう思ふのであつた。

涙をば衣川にぞ流しつるふるき都をおもひ出でつゝ。

彼れの都戀しさもさることながら、僧達の都への思慕は更に悲しいものがあつた。

新しい年が来てやがて遅くはあれど春が訪れて来るやうになつた。彼れは平泉の傍の柳の里に庵してたはしね山の櫻に見とれるのである。

聞きもせずたはしね山の櫻ばな吉野の外にかゝるべしとは。

奥に猶人みぬ花の散らぬあれや尋ねをいらむ山ほとゝぎす。

山一面が櫻であることは世にも珍らしかつた。

三月になつて平泉を去つて、出羽のたきの山に越え、その山寺に櫻を賞し、

たぐひなき思ひいではの櫻かな薄紅の花のほひは。

と詠んでいよく故郷への旅を急ぐことになつた。越後から信濃へ渡り姨捨山を経て木曾に入る。

波とみゆる雪を分けてぞこぎ渡る木曾のかけはし底もみえねば。

谷は深い。雪はなほ残つてゐる。底の見えない岨に立つて、彼れはこの神怪な天の妙工に心を冷すのであつた。

美濃から近江路へ來れは見なれた大湖の風光が前に彼れを迎へるやうに展開してゆく。一年をかけての晩年の旅は無事に彼れを都の人として呉れた。彼れは老驅を顧みてほつとしたに違ひはなかつた。

一三、人の世

旅から旅へと七十年の生涯が暮れやうとする。彼れの旅も最早行くべきところは殆んど行きつくした形であつた。西の方も東の方も凡そ旅してみたいと考へたところは

餘すことなく旅して見た。歌枕は眼を閉づると髣髴と瞼に浮んで来る。彼れはもう満足してよかつた。

一人の旅人であつた彼れは、彼れの心の母である自然の愛を飽くまで受容れることが出来た。溢れるやうな其の愛が彼れを潤してゐるのであつた。

けれども彼れは仙人として人界遠き幽邃に生涯を棄てやうとはせなかつた。人を離れて自然はない。自然を去つて人もない。彼れは一個の人として自然を熱愛して措かなかつたのであつた。

自然を愛するところに自然の愛はなみ／＼と灑がれなければならぬ。事實自然の中に没入することは人であつて始めてなし得るのであつて、人を離れて自然に入ること、自然が其處になくなり、人も其處に無くなつてしまふであらう。自然の愛は其處

にはない。

自然への願ひは人の世の慾求と相刺するかに見える。しかし其れは一應であつて全體ではない。塵の世を遁れて永遠なる自然への願ひはやがて、自然の心を自然の愛を其の永遠の姿に於て人の世に生かすことになり、其れに生きることになる。

人としての心が無くなるのではない。人としての生活が無くなるわけでもない。唯だ自然の愛によつて、心が深く廣く淨く、生活が明るく直く清くせられてゆくのみである。

西行は人の世の果敢なさを棄て、自然の愛に絶つて其の生涯を終へやうとするのである。旅から旅へ身を捧げることによつて自然の愛の心を存分に受けることが出来たのだ。

けれども一人の人であつた彼れは其の生涯を終るまで人としての苦患は遁れるわけにはゆかなかつた。たとひ六慾煩惱の穢れは洗はれても人として運命的に持つ其の根本的なるものを去るわけにはゆかなかつた。

このゆゑに彼れは自然人であると共に何處までも一人の人間であつた。旅をしてゐても花を眺めても世の中を思はぬわけにはゆかなかつた。

彼れは若い時には若い心に驅られて戀の苦しい道を歩んだこともあつた。しかし戀の心は出家して失はれたのではない。其の戀心は人に對してのみではなしに廣く自然にもむけられていつた。

さらぬだに歸りやられぬしのゝめにそへてかたらふ時鳥かな。

かさねてはこからまほしきうつり香を花橘に今朝たぐへつゝ。

やすらはむ大かたの夜は明けぬともやみとかこへる霧にこもりて。

折らばやと何思はまし梅の花めづらしからぬ匂ひなりせば。

行きずりに一枝折りし梅が香の深くも袖にしみにけるかな。

自然に向つたからとて人を忘れてゐたのではない。むしろ人への戀が更に廣く展げ

られていつた、女性ではない友にである。世の人々へであつた。

花をみる心はよそにへだたりて身につきたるは君がおもかけ。

葉がぐれに散りとどまれる花のみぞ忍びし人にあふこゝちする。

つれもなく絶えにし人を雁がねの歸る心とおもはましかば。

一方にみだるともなきわが戀や風さだまらぬ野邊の荳蔻。

朝ごとに聲ををさむる風の音はよをへてかるゝ人の心か。

我が袖の涙かゝるとぬれであれなうらやましきは池のをし鳥。

歎くともしらはや人のおのづから哀れと思ふこともあるべき。

何となくさすがにをしき命かなありへば人や思ひしるとて。

自然を眺める彼れの心にはいつも人があつた。この人のゆゑに彼れは苦しむと共に

樂しみ得ることが出来た。女性に對する戀は、出家を轉期として廣く人の上世の中に

擴げられていつたのである。

彼れの歌が何かは知らず人の心に惻々として迫るものがあるのは、自然詩人として

自由に自然に没入しながらも人を離れ得ない彼れの寂しい心が、其處に吐息をついて

ゐるからである。

山に入り庵を結んで一人淋しく暮すことは、いかに彼れをして人の世を戀しく人々

を愛せずには措けないものにしたか。寧ろ人を去り世を通れることによつて、一層甚

だしくこの感を深めてゐることは、彼れの山里の生活を歌つた歌に滲み出てゐるので

ある。

松風はいつもときはに身にしめどわきて寂しき夕ぐれの空。

こがらしに木葉のおつる山里は涙さへこそもろくなりけれ。

嶺わたる嵐はげしき山ざとにそへてきこゆる瀧川の水。

またれつる入相のかねの音すなり明日もやあらば聞かむとすらむ。

松風の音あはれなる山里にさびしさそふる日ぐらしの聲。

谷のとにひとりで松はたてりける我のみ友はなきかと思へば、

水の音はさびしき庵の友なれや嶺の嵐のたえまたえまに。

とふ人も思ひたえたる山里のさびしさをなくば住みうからまし。

この寂しさは世と人への戀しさから生れて来る。人を去り世を隔てたる淋しさが自然を見る心に一抹の侘を興へてゐると云ふことが出来るであらう。そして其の侘に浸ることが彼れの一つの道でもあつた。

とだえせでいつまで人のかよひけむ嵐ぞわたる谷のかけ橋。

うき世をばあらればあるにまかせつゝ心よいたくものな思ひそ。

世をすつる人はまことにすつるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ。

山里にうき世いとはむ人もがなくやしく過し昔かたらむ。

數ならぬ身をも心のもりがほにうかれては又歸り來にけり。

おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの住かは。

世をいとふ名をだにもさはとどめおきて數ならぬ身の思ひ出にせむ。

この道は、如何なる人も辿らねばならぬ道であつた。たとひ山に入るとも世の生活の中にあるとも其處に隔てはない。彼れの尖锐な感情は、普通の世の人のやうに其れを諦めることは出来なかつた。其れのみではない。それが更に強く彼れの胸を衝くのであつた。眞實を求め深さを求めなければおかない感情が、世の生活から彼れを山に放逐したのであつた。

人の世を離れ一人山の庵に起臥することによつて、彼れは眞實に深く人と人の世を考へることが出来るやうになつた。人と人の世の戀しさもつくづく胸にこたへるのであつた。

彼れはじつとして居れないこの心を抱いて、自然に訴へ都を屢々訪ね旅より旅へと

放浪していつたのである。

西行は遠く別れた妻や子、そして我家に愛を失ふことが出来たであらうか。彼れは其れを口にするをを度んでゐたやうだ。世を思ひ人を思ふ彼れが其れを棄て得る筈はない。山に籠つても旅をしてゐても常に心にかゝつて居た都のこと、その中には彼れの都の生活の過去が入つてゐないとは誰が云ひ得やう。

いそのかみ古きすみかへ分け入れれば庭のあさちに露ぞこぼるゝ。

小笹原葉すゑの露の玉に似てはしなき山を行く心地する。

都に來たときは我家のありし昔を忍ぶことを忘れてゐない。たとひ其の跡に屢々足を向けなかつたとしても、彼れの眼は都の風光を見ると共にいつしか七條の屋形のあつた方向へ向けられたに違ひはなかつた。

其處に三人が暖かい家庭をもつてゐた。妻と子は今いづくにさ迷うてゐるであらうか。妻も出家し娘も發心したと云ふ。高野の麓に侘の生活をしてゐたとも傳へる。長谷寺にて妻との對面があつたと云ふ劇的な傳へもある。

しかし同じこの世に住みながら彼れは遠く彼等を去つてゐるのである。去るが故に其の愛は却つて細やかであるべきであつた。

つがはねどうつれる影を友として鴛住みけりな山川の水。

つがはね鴛が其の影を友として山川に住むやうに、つがはね唯獨りの彼れは山の庵に影を友として生活してゐたのであつた。其の影がいかに懐しいものであり戀しいものであつたらうか。

ふる畑のそばのたつ木にをる鳩の友よぶ聲の妻き夕暮。

この聲に彼れは彼れを戀ひ慕ふ悲しき妻子の聲を聞かなかつたか。

山ざとは谷のかけひのたえくくに水こひ鳥の聲きこゆなり。

呼ぶ聲が彼れの心の耳に響くであらう。

ならびゐて友をはなれぬこがらめのねぐらにたのむ椎の下枝。

林にて樂き生活を笑ふこがらの嬉々としてゐる姿に、獨さびしく妻子を去つた彼れは何を思つたか。鳥にさへ及ばぬ人の世のかなしき運命を泣いたであらう。魔性なきものゝ美しき生活よ。これを友としてゆく彼れは淋しけれど幸福であつた。

一四、雙林の下に

妻子に對する愛。この離れがたき本能、又人と世の戀しさ。その去り難き社會愛。

さうした離れがたい去りがたいものが人としての彼れを苦しめがちであつた。

けれどかゝる愛は人と世を熱愛する彼れを苦しめたけれど、それよりも更に強く強き力をもつて人と世と又自然をも根本から揺振るものは世の無常であつた。萬法流轉の法則である。

世の中に一としてこの法則を遁れるものはない。一切のものは總て移りかはり行くのである。人も木も草も家も、川の流れのごとく暫くも止まることはない。

無心なる自然はこの流轉に従つて何等の苦惱を示さない。花は咲き花は散る。雲は行き雲はかへる。咲くべき時に咲き、散るべき時に散り、行くべき時にゆき歸るべき時にかへる。來往自在其處には屈托がない。流轉のまゝに流轉し、轉變のまゝに轉變

する。

人のみ何故に流轉を流轉し得ないのであらうか、木々は嬉しさうである。鳥獸は嬉々としつゝある。流轉のまゝに、この大法に順へば流轉は無くなる筈であつた。

人の苦惱は流轉を流轉として其の大法に信順することを拒むところにある。智慧の作用が大法を拒否しやうとするところにある。

痛々しくも無常の心が人々を苛むのは、賢しき智慧によつて、蟻螂の斧を大法に向けやうとするからであるならば、苦惱を逃るゝ道はこの智慧を棄てゝ愚にかへるか、諸法の實相に徹するかにある。西行は愚にかへることによつて淨土の信に入り、實相を掴むために天台の圓位を目指して來たのであつた。

しかしやはり彼れは如何にしても一人の人間であつた。大法の前に恭順しながらも

沸々として湧き上つて來る人としての命運を悲しむころは何うすることも出来なかつた。永遠を求めながら短き人生を呷たぬわけにはゆかなかつた。

人一倍感傷的な彼れが、詩人として尖鋭な心に映す無常の悲しみは更に強いものがあつた。

さゝがにの糸に貫く露の玉をかけてかざれる世にこそありけれ。

うつゝをも現とさらに思はねば夢をば夢と何かおもはむ。

さらぬこともあと方なきをわきてなど露をあだにもいひも置きけむ

水ひたる池にうるほふしたゝりを命に頼むいろくづやたれ。

みぎは近く引きよせらるゝ大綱にいくせの物の命もれり。

無常迅速、またゝく暇もない。寧ろ涙もとどまらぬ。

彼れが親しくした人々は多くこの世を去つていつた。高貴の方々も幾人も世を棄て給ふた。顯官の人々も數へ擧げられぬ程世を早めた。彼れの友達も其の半は死の運命に咀はれてゐる。

七十と云ふ稀な生涯を受け得たことは並々ならぬ幸福であつた。けれど寧ろそれはこの世の悲しみを更に長くすることになるかも知れない。

世の中になくなる人を聞きたびに思ひは知るをおろかなる身に。
いですて、後の行方を思ひはばさてさはいかにうら島の筈。

うらくしとしなんずるなと思ひとけば心のやがてさぞとこたふる。
はかなしな千とせと思ひし昔をも夢のうちにて過ぎにけるかな。

灯のかゝげぢからもなくなりてとまる光を待つ我が身かな。

果敢い人と世に彼れは無常の心をしみくと胸に徹してゆく。其の無常を超越するために彼れはいかに藻掻いたか。世を呪ひ自己を嘲り人を悲しみ、法を求め、無常と戦つて來た。しかし彼れは最後にそれに敗れてゐる。

我が宿は山のあなたにあるものを何とうき世を知らぬ心ぞ。

くもりなきかゞみの上にある塵を目にたてゝ見る世と思はゞや。

ながらへむと思ふ心ぞつゆもなきいとふにだにも足らぬうき身は。

思ひ出づる過ぎにしかたをはづかしみあるにもものうきこの世なりけり。

捨てたれどかくれてすまぬ人になれば猶よにあるに似たるなりけり。

世の中を捨てゝ捨てえぬ心地して都はなれぬ我が身なりけり。

捨てし折の心をさらにあらためてみるより人にわかれ果てなむ。

くれ竹のふししげからぬ世なりせばこの君はとてさし出でなまし。
 あしよしを思ひわくこそ苦しけれどあられるればあられる身を。
 深く入るは月ゆえとしもなきものをうき世忍ばむみよしの山。
 あらぬだに世のはかなきを思ふ身にぬえ鳴き渡を明ぼの空。
 鳥邊野を心のうちに分け行けばいまきの露に袖ぞそぼつる。
 いつの世に長きねぶりの夢覺めておどろくことのあらむとすらむ。
 世の中を夢と見る／＼はかなくも猶おどろかぬ我が心かな。
 なき人もあるを思ふに世の中はねぶりのうちの夢とこそ知れ。
 きしかたの見しよの夢にかはらねば今もうつゝの心地やはする。
 ことゝなくけふ暮れぬめりあすも又かはらずこそはひま過ぐるかけ。

くれ竹の今いくよかはおきふしていほりの窓をあけおろすべき。
 はかなしやあだに命の露消えて野べに我身の送りおかれむ。
 彼れはかく其の五十年の修行時代を苦闘して來たのであつた。旅も歌も庵もこの苦悶の生活の象徴であつた。この苦患は如何にしても彼れの生涯には拭ふことは出來ないものであつた。彼れが大井川の渡で一人の出家として人の侮辱によく堪えたと傳へられるが、其處まで修行を積んだ彼れであつても、この人に與へられた苦杯は棄るわけにはゆかなかつた。
 彼れの苦闘は失敗であつた。苦を抜くための苦戦は彼れの敗北であつた。しかしかれはその戦ひの最後に於て釋迦の教は永遠に違はない宇宙の大道であり、無常の大苦は其の道に入ることによつて救はれることを知り得てゐる。其の修行は自然に隨順す

ることであることも悟り得たのであつた。

晩年高野の舊栖を去つた西行は京都東山の雙林寺に庵を結ぶことになつた。雙林の下に庵を營んだことは釋迦を信すること厚い彼れが、釋迦の沙羅双樹下の入涅槃を慕ふて彼れの好きな花の東山に靜かに樹林に圍まれたこのゆかりの地、雙林寺を選んだのであつた。

文治六年が迎へられた。彼れは七十三歳の高齡を重ねてゐた。高野への道を辿つて大師の本廟に詣ずるためでもあつたか、河内弘川寺に暫くの錫を留めてゐる中に病を得ることになつた。

願はくば花のもとにて春死なむそのきさらぎのもち月のころ。

この願ひは遂げられた。春の最中の二月十六日。釋迦の入滅に日を同じくしてこの

大自然詩人は彼れの欲してやまなかつた大自然の胸に還つていつた。花に圍まれて釋迦と手を握りながら。

— 了 —

一

茶

僻める一茶

一

高井郡六川郷六かはの里、山の神の森にて栗三ツ拾ひ來りて、庭の小隅に埋め置たりしに、つやくと芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にて家に家を造り足しぬるからに、月日の恵みとどかず、雨露の潤ひうとければ、其としやをら一尺ばかり

伸びけり。しかるを此國のならひ、冬に成れば東より、西より、南より、北より家の大雪をひたおとしに落し込むからに、恰も越のしら山、一夜に兀と湧出たるにひとしく、其山薪水をはこぶ道を作るに愛宕山の石壇登るがごとし。漸く二三月ごろおしなべて長閑なるに、隣々の脊戸畠は草木青みわたりて花もまれく咲けるに、彼山はいまだ真白妙に風牙へて嚴寒を欺くけしきにて、や、卯月八日、髪さげ虫の歌を厠に張るころ、山鶯の折しり貌に鳴けば、雪の消え口より見るに哀なるかな、栗の木末は根際よりぼつきりと折れて仕廻ぬ。人ならば直に無常のけぶり立昇るべきを古根よりそろく青葉吹て、からうじて一尺ばかり伸けるを、又前のごとく家の雪を落し込まれてぼきりと折れ、年々折れくつて、ことし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入るちからなく、されど此世の縁盡されば枯も果ずして、生涯

一尺程にて生て居るといふばかりなるべし。我又さの通り、梅の魁に生れながら茨の遅生へに地をせばめられつゝ、鬼ばゞ山の山おろしに吹折られくつて、晴れくしき世界に芽を出す日は一日もなく、ことし五十七年、露の玉の緒の今迄切れざるもふしぎ也。しかるに、おのれが不運を科なき草木に及すことの不便也けり。なでしこやまゝは、木々の日蔭花 一茶

さるべき因縁ならんと思へば、くるしみも平生とは成りぬ。
 朝夕に覆かぶさりし目の上の
 辛夷も花の盛り也けり 一茶

いたいけな一本の栗に一茶は自分の運命を眺め、自分の生涯の浮ふしを充分に示し

てゐる。洵にこの不運な栗の木のやうに彼れほど世の憂さを其の心に銘じたものは世に幾程もないであらうか。

やうやくに芽め出し葉をひろげたかと思ふまもなく、雪崩がこの可憐なるものを用捨なく打砕いでしまふ。それでも猶ほ懲りずに又葉をひろげて来る。雪崩が又それを痛めつけるのである。

彼れは五十七年のこの日まで、この栗の運命を畏んで来たのであつた。忍従といふ苦しい心を押へて今この栗の運命に自己の過去を回想するのであつた。

けれどこの栗が如何なる運命に見舞はれても、やはり其の生をつないでゐるやうにしかもこの屋蔭の陰鬱なところに如何にも不平を知らないものゝやうに其の運命を畏みつゝじつと其の生をまもつてゐる。

彼れはこの栗の運命に、深い同情と、そして何ともいへぬ心の豊さをも感ずるやうになつた。さるべき因縁ならんと思へば、くるしみも平生とは成りぬ。と忍従の最後に来る平安を今にしてはじめて悟るのであつた。

朝夕に覆かぶさりし目の上の

辛夷も花の盛り也けり

繼母に虐められ義理の弟に家を分たれ、三人の妻をかへ、幾人もの子に先立たれ家は焼け不治の病に斃れると云ふ悲惨な一生を持惱んで来た彼れも、其の老後には、今こゝまで其の心が開けて来たのであつた。

辛夷も花の盛り也けり。

一人の僻める人間が、愛に餓ゑつゝ、辿りついたのがこの花盛りであつた。拳も花

が咲く。一人の人間一茶の最後に來つたこの世界は洵に尊い、人として有し得る限りの豊かな世界であつた。たとひ彼れが其の生を終るまで悩みを盡すことは出来なかつたとは云へ、この平安なる心を持ち得たことは其れ以上の幸福と云はなければならぬ。

二

この不運な生を享けた一茶は寶曆十三年の五月五日に信濃水内郡柏原の農人、小林彌五兵衛の長子として呱呱の聲をあげたのであつた。幼名は彌太郎名は信之。

彌太郎の母は隣村の庄屋の娘でくと云つたが、其の母の里から考へても小林の家は相當な暮しをしてゐたことは想像せられる。祖母のかな女と父と母と彼れとの生活はこの田舎には珍らしく恵まれたる家庭であつたことは云ふ迄もなかつた。

北に妙高の峻嶺がそり立ち、西には黒姫と飯綱の諸峰が並び、其の奥に戸隠の靈峰が姿を見せてゐる。雲を呼ぶこれ等の山々の影を映すやうに東に野尻の碧い湖が控へて、いかにも奥信濃らしい狭い山狭に沿うて、北國街道がくねつてゐる。其の街道筋の一つの宿場が柏原であつた。

彼れの眼がはじめて物を見た時には、周圍の眼のとゞかぬやうな高い山と、山との峽にある狭い土地に幾つか並んだ家々と、蒼く晴れ切つた限られた空が彼れに映じたのであらう。

淋しい宿場の村とは云へ、佛都善光寺と越後の町々をつなぐ街道であり、遙かに江戸と北國の國々とを其の曲りくねつた長い線上にもつこの村は、相當に人の往來があつた。

けれどじやん／＼鈴を鳴らして通る馬の往來。駕籠や荷車の通ひに雜る馬子や雲助の歌。さうした雜音は、白く光る一筋の道を限つて、其外は眠るやうに靜かな景物が太古のまゝの靜寂を保つてゐた。

大名の行列が時たまにこの眠れる村を驚かすことがあり、彼れがよく云ふ毘殿の怖い顔も時々見ることがあつても、それ等が去つた後は嵐の後のやうな靜けさがあつた。

彼れの心は、この山峽の村に、其れがもつ秀た自然とこの單調な人事と幸福な家庭とに育まれて、いとも暢やかに生ひ立つてゆくのであつた。

(父はこの時代の村の人々がするやうに、百姓と其の暇に馬を曳く仕事の外は割合に暢氣な田舎生活の屈託を、茶や花や俳句に消すだけの餘裕をもつてゐた。ことに俳句

には精を出してゐたやうで自ら宗源と號して句作を相當にしてゐたのであつた。

彌太郎は、平和な家庭に肉親の鍾愛をほしきまゝにしてゐた。この父が傾ける愛に母の初子を慈む熱愛。それに祖母の愛は特に涙ぐましいものであつた。母が父と共に野良に出る時は云はずもがな、乳に乏しかつた母の乳房を補ふための貰乳に彼女はいかに親身にそれを苦んだか。

おのれ三歳の時、母の親は身まかりぬ。老婆不便がりて、襦袢のけがらはしきも厭はず、明暮背に負ひ懷に抱きて、人に腰を曲げて乳を貰ひ、又は首を下げて藥を乞ひつゝ育てけるに、竹の子のうき節しげき世の中も知らで、づか／＼と伸びける。

彼れを突然襲うた怖ろしい嵐は母の死であつた。母の死と云ふ慘らしい運命を三歳

にして背負はされた彼れを、じつと眺めてゐられない祖母は、やはり早く乳に離れた彼れを母にかはつて見取らなければならなかつた。この祖母を彼れは心の底からいつまでも感謝してやまなかつたのであつた。

明和三年八月十七日。彼れにとつては何と云ふ不吉な日であらうか。人並よりは少し弱々しかつた彼れの母は、彼れの父とこのいゝ祖母と、愛ぐし獨り子の彼れに後髪引かれながら、不歸の世界に旅立つてしまつた。

静かな息ひの森に突如襲うた嵐であつた。さなきだに時は秋であつた。信濃の高原には秋は早い。けれど落ちるにはやき木の葉はこの一陣の疾風に一たまりもなく捲しられてゆくやうに、母の死は彼れの家の幸福を根こそぎ持去つてしまつた。事後の淋しさはこのいたいけな彌太郎の幼い心に剃刀の如く深く喰込んでゆくのであつた。

よく稼ぐ父の手によつて支へられてゆく生活は、母の死によつても少しも彼れを餓ゑしむることはなかつたし、寧ろ父と祖母の愛は一層の深さか加へてゆくのみであつた。けれどこの注がれた溢れるやうな愛によつても、身に餘る幸福によつても、却つて彼れの心は、其れに反して何か補はれない、次第に餓ゑてゆくものをつくく覺えてゆくのであつた。

乳房を懐しんだ悲しき母の愛。淀みなく出る乳のやうに底しれずなみくと溢れて深い温い愛。全身を放擲つて血を子に盛る血によつて塗られた愛。かうしたものが彼れを沸々と湧く愛によつて煮えたくせて來たのであつた。

それが今や一朝にして撈ぎとられてしまつたのであつた。彌太郎ははじめて悲しみを知つた。淋しさを味ふのであつた。それは日々、に彼れを味氣ない世界に追立て、ゆく。娛く遊んでゐて突然じつと物を考へるやうなことが屢々あるやうになつていつた。

獨り遊びをするやうになつて、逞しい勝氣な村の子等の中に雜る彼れは、何となくか細い引込思案の影の薄い存在であつた。心のまゝに振舞ふ天にも昇りたいやうなはち切れる彼等の遊びには、心の暗さを夢にも見られなかつた。

(ともすると其等の子等は、この子供らしくない彼れを女々しい存在として侮蔑するのであつた。母の無いいたいけな彼れは、同情せられるのではなしに、寧ろ母なきゆゑに子供等の天國には這入れない無資格者であつた。母を持たぬ。そのことは彼等に

は片輪として不具者としてしか認められなかつた。

意地の悪い友達は威上丈になつて彼れをからかひさへする。

親のない子はどこでも知れる。爪を啜へて門に立つ。

まるで罪人扱ひとしか受取れぬ侮辱を時々頭から浴びせかけられるのであつた。母なきものがもつ云ひ知れぬ悲しみを踏に蹂つて、猶ほその上に唾するこの彼等の仕打は温順い彼れをますく卑屈に陥れるのであつた。

幼い彼れは時々悲憤の涙に暮れるのであつた。母上は何故に自分の側から去つてあの淋しい墓場に行つたのだらうか。自分には何より強い味方であつた母が、あの蒼ざめた死骸になつて野の涯に埋められたのであらうか。

彼れは次第に子供の群から遠のくやうになつていつた。庭の門邊に獨り俯むいて土

を弄びながら考へこむ日もあつた。人遠い裏畑の萱の片陰に唯ひとり半日を下目がちに過すこともあつた。

親のない子はどこでも知れる。爪を唾へて門に立つと、子供等に唄はるゝも心細く大方の人交はりもせずして、裏の畠に木萱など積みたる片陰にせぐゝまりて、永の目を暮らしぬ。

わが身ながら哀れなりけり。

② われと来て遊べや親のない雀。

恵まれぬ不運の彌太郎は、幼少の頃からこの冷酷な世の扱ひを悲しまねばならなかつた。爪を唾へて門に立つ悲惨な運命は、人の子として洵に涙なくしては居れなかつた。見るもの聞くもの一として彼れを心から娯ませてくれるものはなかつた。

この可憐な愛子の姿を見ては、父もじつとしては居られなかつた。眼には露を宿さなかつたけれど心に涙ひまなき父は、兎に角、自分の好きな道でもあり、この子の慰みにもなり、學問にもなると云ふので、この村切つての學者、本陣の中村新甫について手習ひを初じめさすことになつた。

新甫は俳道の達者であつた。この彌太郎のもつ天分を知つた彼れは熱をもつて彼れを導いて呉れるいゝ師匠であつた。子供等との遊びを不快に思ふ彼れは師匠の元での勉強を心から悦んで居たのであつた。

母は無けれど育てば育つ。子供等との遊びを屑しとしない彼れは、一途に學文の道に精進した。一年二年はそれでも夢のやうに過ぎていつた。

彼れの淋しい心は勿論忘れられたのではない。文字を読み心づくに従つて寧ろ深刻

になつてゆくのであつた。一人ぼつねんと所在のない時は庭の片隅で無心な小鳥や虫
共に友を求めたのであつた。

そのうちでも雀は彼れの最もいゝ友達であつた。何の悲しみも知らぬげに屋根に庭
に睦れ遊ぶ雀を見るときは、何となく心が晴々とするのであつた。ことにひよこく
と親を離れて庭に餌を獵る雀の子でも見ると、彼れの淋しい心はこの可愛いものに注
がれてゆくのであつた。

「われときて遊べや親のない雀。」

ふつと胸を衝く淋しさが、このものに深い同情となつて注がれると共に、このもの
から飽くなき同情を求めやうとするのであつた。彼れの心に雀の心に移して限りない
心の平和を味ふのであつた。

四

雀に友を求め虫によい伴侶を得ることによつて、彼は其の淋しさを忘れ、好きな
學文の進むことが又彼の無聊を慰めて呉れるのであつた。やつとのことで漸く取戻
した心の平和であつた。

ところが明和七年を迎へて彼れが八歳になつた頃、家事を思ひ悩んだ父は、子に濟
まないとはい思ひながら後妻のさつ女を近郷から娶とることになつた。彼れに第二の母
が迎へられたのである。

母と呼べば母と答へる。そうした親身な母として彼女が彌太郎に迎へられるのであ
つたら、彼れも血の母を忘れるであらう。生みの母を忘れてもいゝ管であつた。

新來の母は彼れの心に求める母ではなかつた。そこにはぎごちない落付かぬものがあつた。びつたりと解けあふものを求めても、其の觸れの尖端に其れを反撥するものがあつた。子に對する眞實なる愛が其處には無かつた。

一人の義理の子のあることを承知して來たさつ女であつたが、眞の子を愛したことのない彼女は、この義理の子に表面を繕ふことは忘れなかつたけれど、慰むべき母なき子を傷める心は持合してゐなかつた。

淋しかつた彼れの家は俄に賑やかになつた。家事に忙しかつた祖母はこの代理者に其れを委ねてやつと痛い腰を暢すことが出来るやうになつた。父の愁眉は漸くにして解けそめて來た。

けれど、唯落付かないのは彼れであつた。淋しかつたけれど心の平和をやうやく得

つゝあつた彼れの胸の平和を、かき亂されるやうな不愉快を彼れは感じつゝあつた。結局さつ女は、父の妻であつて彌太郎のいゝ母ではなかつた。

いそ／＼として新家庭の妻のやうなかひ／＼しい幾日かゞ経つと、さつ女の態度は次第に本性を露骨にするやうになつていつた。家の事情が飲込めるやうになると、彼女の氣儘が時々其の繕ひの隙から覗くやうになつてゆくのであつた。

父や祖母には遠慮があつた。けれど彼女の子として宛行はれた彌太郎に遠慮が無くなつてゆく。それのみではない。かゝる餘けいなものが彼女の女の重荷となつて前にぶら下つてゐることは、彼女にはやうやく不快と考へられるやうになつて來た。

すげない言葉が交されるのはまだよかつた。眼角を立て、白眼を彼れに向けるやうになつてゆくこともまだ辛棒が出来るであらう。しかしそれが募つて口穢く罵られる

やうになつて来るのみか、やがては邪魔者扱ひに、蔭になり日向になつて彼れを攻るやうになつて来ては、彼れも僻まざるを得なくなつてゆくであらう。

春さりくれば畑農作の介となり、晝は日もすがら葉摘み、草刈り、馬の口取りて、夜は夜すがら、窓の下の月明りに杳打ち、草鞋作つて、文學ぶ暇もなかりき。

新甫師匠への學文稽古も何日の間にか通へないことになつた。未だ出たことのない畠に連れられて下男代りにこき使はれることになつた。怖ろしい馬の口取、夜通し草鞋作りの苦勞が到頭彼れの日課となつてしまつた。

地獄の羅刹のやうにさつ女は彼れを苛むことになつた。父や祖母は人がよかつた。この非道を見ないのではない。見て居て其れをどうすることも出来なかつたのであつた。

八歳といふとき、後の母來りぬ。その女茨のいらくしき行迹、山おろしの烈しき怒りをも、老婆袖となり垣となりて助けませばこそ、首に雪を頂くまで露の命消え残りて……。

心に泣き蔭に庇ふ祖母の愛が、やうやくに彼れのこの苦行を慰めて呉れるのであつた。茨のとげくしき嵐のはげしきに均しいさつ女の責苦は、何日盡きはつとも見えなかつた。

受難の嵐の中に立つ可憐な彌太郎には、神も手を觸れ給はぬやうにさへ思へたのであつた。受苦の週期は未これからであつた。嵐はまだ激しくなつてゆく。

二年が経つた。十歳の彼れに、更に暗雲が迫つて來たのである。明和九年の五月には弟の仙六が誕生した。かうなつては彼れは愈々不利であつた。繼子と云ふ悲惨な

名が終に彼れの上に被さることになつてしまつた。

繼母の爪は益々磨かれ、牙は愈々鋭くなつて來た。生れたばかりの赤坊は彼れの背の荷物となつた。朝から夕まで肩の痺れる程、子守に忙しくなつた。泣く兒を抱いて自ら啼くことも屢々あつたらう。春の長の日も秋の短き日の暮れゆくまで、彼れの背は仙六の涎と小便の乾く暇はなく、濡れそぼちがちであつた。

それのみではない。兒のむつがればむつがるとて、義理の弟故に虐るやうに疑はれては、杖のうき目に逢ふこと日々數を知らなかつた。地獄の責苦を身に受けて泣く彼れの臉は常に腫れがちであつた。

世間の人々は見るに見かねて祖母や父にそつと耳打しては呉れるけれど、何の效果も見えなかつた。彼れはたゞ忍苦の齒を嚙締るより他に仕方がなかつた。

晝の疲れを夜着に横へて眠れぬまゝにじつと閉ぢた彼れの眼に映るのは、ありし日の母の面影であつた。靜かに彼れを見守る愛に充ちた生母の瞳が涙にうるんでゐる。幼い記憶はともすればこの懐しい面影をぼうつと溶かせようとする。彼れは一生懸命その臉の母を眼の中に生かさうとする。そうした覺束ない幻によつてやつと彼れは慰むことが出来るのであつた。

五

繼母の法外な非道は、いつまでも彼れを従順な子として従はしめなかつた。追々年がゆくにつれて、心の恨みは外に現はれて來るやうになつた。むら／＼として起つて來る反抗心は押へやうとしても押へることが出来ないやうになつた。

彼れと彼れの母との間に築かれた溝は到底埋めることが出来ないのみか、日を追ひ年を重ねるに従つて深められてゆくのみであつた。一寸したことからお互に感情の纏れることは未しも、睚みあつては如何にもならないことも度々あるやうになつていつた。

安永五年の秋の八月、六十六歳を一期として二人の仲を兎に角保つて来た祖母が、他界するやうになつた。このことは彌太郎と繼母との不味い仲を到頭其の最後の行着く處までおしやつてしまつた。

抑も汝は三歳の時より母におくれ、やゝ長けなるにつけても、後の母の仲睦まじからず、日々魂をいたため、かすく心に心火を燃やし、心の安き時はなかりき。ふと思ひけるやうは、一所にありなは何時迄もかくありなん。一度故郷を離れたらん

には、また慕はしき事あるべきにと、十四歳といふ春、遙々江戸へ赴かせたりき。温順い父は二人の不仲を見るに忍びなかつた。と云つて自分の力で仲を睦まじくせしめるだけの壓力は持合せてゐなかつた。仕方なしに二人を離すことが一番い策であることに氣がついたのであつた。

可愛いことは可愛い、今却つて彼れを家より出すことが、彼れの將來のためにも自分の愛の誠を盡すためにもいと考へたのであつた。それに又現實の家庭の纏れを救ふ方法もこれより他にはないと決心したのであつた。

けれどいざとなれば、いとしい彼れを手放すことは、父の身には身を切られるやうな愛着が今更のやうに胸を衝いて来る。無力な父はそれをも忍ばねばならなかつた。母の無い子、それは彼れの唯一人の味方の祖母もみまかつた。この際とるべきは、こ

の策より他にはない。

涙を噛みしめた父は、初めての旅に出る子を江戸に遠く見放すのであつた。

父は牟禮まで送り給ひ、毒なるものはたばなよ、人にあしざまに思はれなよ、とみに歸りて健かなる顔をふたゝび我に見せよや、といとねもごろなる言葉に、おもはず涙うかみしが、未練の心ばし起りなば連れなる人に笑はれん、父に弱き歩みを見せじと、むりに勇みて別れけり。

父に送られ牟禮で別れて未知の都へ急ぐのである。江戸へ旅する人々に連れられて他人の世界に一步を踏みしめる彼れは、しかしもう十四才を數へてゐた。

人並の身體に近い彼れが、今更女々しい根性を見せるわけにはゆかなかつた。涙は思はず臉に交つて來るけれど、其れを臉に隠して次第に苦勞に老いてゆく父の姿を見

返り見返り遠のいてゆくのであつた。

當があつて江戸へ出てゆくのか、當なしに都へ修行に行くのか、その何れにしても心細い初旅であつた。山又山が何處までもつゞいてゐる。雲に秀づる峯々は故郷を去るに従つて大きく遠く聳えてゐた。

妙高も黒姫も飯綱も戸隠も其の全貌がはつきりと仰がれた。其れ等の山々の背後には未だ知らなかつた更に高峻な山々が遠く高く聳えてゐるのが眺められた。

山に育ち峯に息づく彼れは、重疊たる山々を見て、いかにも故郷信濃の山國であることを今更のやうに覺るのであつた。その山々も次第に雲の彼方に消えてゆく。山がやうやく低くなつて、幾日かの後には見なれぬ關東の大平原に驚くのであつた。

江戸へついて、少年彌太郎は口すぎの道を求めねばならなかつた。

園原やそのはなならぬはき木に、住み馴れし伏屋を掃き出されしは、十四の年にこそありしが、巢なし鳥の悲しみは、直ちに埒に迷ひ、その軒下に露を凌ぎ、かしこの家陰に霜をふせぎ、あるは覺束なき山に迷ひ、聲を限りに呼子鳥、答ふる松風さへもの淋しく、木の葉を敷寝に夢を結び、又あやしの濱邊にくれ羽鳥、人もなぎさの汐風に、からき命を拾ひつゝ、苦しき月日を送る……。

生馬の眼を抜くと云ふ江戸のはげしい生活は、山出しの彼れには向かなかつた。小僧としても、下僕としても不向であつたので、何處に奉公しても永續きはしなかつた。職については職を離れ、其れを追々重ねてゐるうちに、職を求めることさへ彼れには不快になつて來た。

人を訪れ人に頭を下げることさへ臆劫になつて來る。ついにはあくせくと急がしく

生活に没頭する人々の顔を見ることがさへ面白くなつてゆく。繼母によつて僻まされた彼れの根性は、又しても職を離れることによつて僻みを加へてゆくことになつた。社會を咀ふと云ふやうな大それた考へは小心ものゝ彼れには起らなかつたけれど、其のゆゑに彼れは自らを嘲けり人と世を僻むやうになつてゆくのであつた。

巢なし鳥の悲しみは、直ちに埒に迷ひ、その軒下に露を凌ぎ、かしこの家陰に霜をふせぎと云つてゐる一人の流浪者として、江戸の町々を乞食のやうにさすらひ零落の生活をつゞけるやうになつた。

あるは覺束なき山に迷ひ、聲を限りに呼子鳥、答ふる松風さへもの淋しく、木の葉を敷寝に夢を結び、又あやしの濱邊にくれ羽鳥、人もなぎさの汐風に、からき命を拾ひつゝ、苦しき月日を送る……。

名もなき山にさすらひの無名の海邊に漂浪する一人のボヘミヤンとして、世の敗残者の苦き生を嘗るやうにさへなつた。

明日の米をさへ心配せねばならぬ彼れは、容れられぬ世を啣つてばかりは居れなかつた。と云つて彼れが住むべき所は廣い世界にももう無くなつてゐた。江戸のはし／＼に其の住所を求めて求めあぐねてゐた彼れは、やはり乞食の生活まで落ちねばならぬ位迄窮迫してゐたのであつた。

丁度谷中の本行寺に假の宿を求め得たことは、涯しらぬ生活道を彷徨して居た彼れには、洵にやう／＼にして發見した彼れの亞米利加でなければならなかつた。

こゝの和尚が俳人であつたことから考へると、苦しい流浪の生活のうちに於て、彼れは最後に彼れの寄るべき生の落付きは、やはり俳人の生活であることを悟つてゐた

やうで、このことが彼れをしてこの寺に彼れの身を寄せしめたのであらうか。

たとひこの寺に身を寄せなくとも、彼れのやうな世の拗者の行くべき道は、どうしても俳人の生活より他に仕方がなかつた。又そのためには彼れの天分は充分に具つて居り、この漂泊の幾年かの生活によつて益々未知の俳域を彼れの心に臚氣ながらも見ることが出来たであらう。

六

天明七年彼れ二十五才の年。十四才からの彼れの江戸生活は轉々として漂浪のうちに過ぎ去つて、やうやく十年の日子を數へたこの年、はじめて彼の動靜を明かに知り得る。十年のとりとめもない生活のうちに、彼れは次第に俳道への道を辿りつゝあつた

こと、そして今は二六庵竹阿の門下にあつて、蕉風の俳諧に精進しつゝあつたことが、白砂人集の手寫をしたこと、及び小林圀橋と號してゐたことなどによつて明かに示されて来る。

一人の俳人として俳諧の王國江戸に於てその道に入ることは、たとひ其れは彼れにとつては荆棘の道であつたとは云へ、彼れとしては其れに満足していゝ筈であつた。父には俳諧に相應な天分があり、其の血を受けた彼れが、又この道を選ぶことは父に於て未だ出なかつたものを、彼れは彼れの血と共に受繼いで、更に彼れの天分の上に其れを生かすことでもあつた。

そのみではない。凡常の人として人並の生活をなし得ない、世の敗殘者である彼れが、彼れの生きてゆく道は唯この一筋であることを自覺し、其の自覺の上に彼れの

天分を盛上げることによつて、彼れの本性に根ざす新しき俳道の分野を開拓するためには、つひにこの道に這入つたことは決して無駄ではなかつたし、彼れのやがては來らなければならぬ道を選び得たことでもあつた。それに彼れはせめてもの満足を微笑んでいゝ筈であつた。

それから三年が事もなげに経つていつた。寛政二年、彼れの二十八才の年。彼れの俳道の手解をして呉れた故郷の師匠中村新甫と、自分の今師事してゐる竹阿とが、同じくこの世を去つていつた。殊に二六庵師匠がみまかつたことは、彼れが熱心に勵みつゝあつたこの道の先達を失つたことになる。彼れも一時は途方に暮れたであらう。しかし、血の若い、しかも人一倍小心であつたが故に、殊に強く生活苦の洗禮を受けた彼れは、それだけ人と違つた深い體驗を嘗めさゝれて來た。この體驗が落莫とし

て一入影を薄くしてゐる蕉風俳諧の道に何時までも彼れを縛り付けては措かなかつた。

落潮滔々たる俳諧道に嘗て芭蕉がしたやうに、身をもつて俳道の再建を企てることによつて、この道を生かし自己を生かすことを、彼れはほのかに胸に誓つてゐた。そのためには不義理を忍んで二六庵の門下を辭することが唯今の彼れの採るべき道であつた。

其の翌年、屑く門を辭した彼れは、もとの自由な圮橋にかへつて、何者にも束縛されない自己の道を一途に進むことが出来るやうになつた。彼れは彼れの本性に鞭打つことによつて、獨自な世界を拓いてゆかうとするのであつた。

翌寛政三年の三月には十五ヶ年の離郷によつて、たえて久しく訪れたことのない故

郷に懐しい父を見舞ふために江戸を出發し、五月には夢寐にも忘れることが出来なかつた郷國の風光に接し、父の膝下に投じたのであつた。

めつきりと年をとつた父は、それでも健在であつた。三十に近い彼れは十幾年かの放浪生活を顧みて、父の足しにならなかつた自分を恥ぢながら、もとの十四才の彼れのごとく父の左右にまつはるのであつた。

しかし彼れは尾羽打枯らして歸郷したのではない。前途は遙かに雲に隠れてゐるけれども、江戸で藻掻いた頃の漆黒な憂鬱はなくなつて、希望の微光は確かに射してゐるのである。その光を指して躍進しようとする彼れには、晴れやかな笑ひがあつた。

翌寛政四年には彼れも三十才を迎へたのである。久々にて故郷の新年に逢ひ、生れ變つたやうな心安さを感じながら、早々俳諧寺一茶と名を改め、

○春立つや彌太郎改め一茶坊

「と詠んでゐる。一切のこだわりを棄て、本性に還る彼れが名としての一茶坊はいかにも彼れに相應しい名であつた。」

立つ泡の消えやすきものから名を一茶坊といふ。

◎泡のごとく消えやすき人生に一抹の苦味を捧げる彼れの俳道への道が其處に示されてゐはしないか。

（新しい道を行くことに決心した一茶は、早速故郷を鹿島立つて、芭蕉のやうに旅に身を瘦せやうとする。東海道を振出しに伊勢より上方を経て、四國に出て、九州に渡り、中國を經廻り、もとの古巢の江戸へ落付くまで前後四年の日子をこの旅に費してゐる。この大旅行を終へてからは、旅は彼れの憑物のごとく諸方の一見に寛政の末年

までを過してゐるのである。）

「この旅によつて彼れの俳魂はいかに養はれたか。所謂一茶調なるものが其の芽を出して來たと云はれてゐる。彼れの独自のものが次第に芽を吹いて來たのであつた。物を深く見ねば措かぬ意地が、ぼつ／＼現れても來るが、彼れの心の底からの僻みが遠慮なく露骨に現はれても來るのである。」

道端の雑草のやうに踏蹂られ打碎がれた彼れの本性は、やがてこの僻みとなつて毒々しく吐出されねばならぬ。自嘲、慢罵、拗の形をとつて、この人のいゝ一茶はそれを臆面もなく吐かねば彼れの腹の膨れはとれなかつた。こゝに彼れの人のよさ、素直さがある。腹黒くてこれを胸にしまつて意地に持つことが出來なかつた彼れはやはり生れつきの善人であつた。

涼しさや缺釜一ツひとりすみ。

更衣しばし風を忘れたり。

やゝ寝よき夜となれば夜の寒哉。

旅をする。たとひ江戸にかへつても旅を味つた後の彼れは、江戸の住居もやはり旅であつた。唯ひとり旅の世を暮らす彼れには缺釜一つの生活の心安さを思ひ、更衣に風の苦を忘れつゝも、夜寒の頃の寒さには、獨住の淋しさと、恵まれない生活に心の鬱を感じないわけにはゆかなかつた。

七

旅から旅に又しても十年を過した一茶は、享和元年の四月に心なしか父が戀しくな

つて信濃の故郷に歸つていつた。七十に近い父は彼れの一日も忘れ得なかつた一茶を迎へて間もなく、氣のゆるみか傷寒にかゝつて病床に就くことになつた。

彼れは父の側を離れず枕頭にあつて看護の誠を盡すのであつたけれど、病は日々に重く神かけての彼れの祈りもつひに酬ゐられず。涙にぬれる一茶のみとりに満足しながら一月の療病の後この世を棄てゝしまつた。父の死に逢ふために彼れは歸つたのではなかつたが思はぬものがつひに來てしまつた。

人生の無常はさりながら、いよく唯一つ彼れにかゝはつて居た愛の絆は切つて放たれた。大海の眞唯中に追ひやられたやうな人生の孤獨を、つくづくと身に泌みて想はずにはゐられなかつた。

父の葬ひをして後、父の遺言の遺産分配に就て繼母さつ女と不愉快な交渉に日を消

して、それもやつと話は纏まつたが、慳貪な彼女は其れを履行しやうともしない。

一茶は父の死の直後であり、見悪い諍も佛のためでもなく、契約さへ纏まれば後は餘熱の冷めてからと、さつさと故郷を立つて江戸へ歸つて來た。彼れの氣になつてゐた父も無くなつたし、唯この身一人が身過をすればいゝのであつた。

眞に氣樂な心になり得た彼れは、修道僧のやうに食を天にまかせて居所を轉々としながら、江戸を中心に近國近在へ俳行脚の生活を送ることになつた。

明ぼの、春早々に借着哉。

缺鍋も旭さす也是も春。

またことし娑婆ふさげぞよ草の家。

霜どけやとらまる枝は茨也。

霞み行や二親持ちし小すげ笠。

家もはや捨たくなりぬ春霞。

梅咲けど鶯啼けどひとり哉。

身じろぎもならぬ塀より柳哉。

見限りし古郷の山の櫻哉。

秋立や身はならはしのよその窓。

一つなくは親なし鳥よ秋の暮。

秋寒や行先々は人の家。

よりかゝる度に冷つく柱哉。

未枯も一番はやき庵哉。

秋の山活て居る辺うつ鉦か。

秋の風親なき我を吹そぶり。

秋風や家さへ持たぬ大男。

それがしも雪を待つ夜や缺土鍋。

五十にして冬籠さへならぬ也。

この五年近くの放浪の生活は、四十を過ぎた彼れの淋しさが滲み出てゐる。次第に寂しくなつてゆく生活は孤獨と貧乏とそして僻みの根性を愈々強く示して来る。俳人の仲間を遊いでゆく暮しは自由であり奔放であるやうであつたが、其處に又何とも云へぬ身の不自由と孤寂な身にこたへる淋しさがあつた。

その時には常に彼れは父は無いけれど、搖籃の地信濃の故郷が想へるのであつた。

じつと眼をつぶつてみると故郷の山容が臉に映つて彼れを招くのであつた。彼れは郷愁の止みがたい心に驅られて、ふつと古里への旅を思ひ立つのであつた。

勿論其處には繼母と仙六がゐる。この二人を憶ひうかべると、歸心は消されがちであるが、それでも文化四年の冬には思ひ切つて故郷へ旅立つてゐる。山と水は美しく清く瞳を開いて彼れを迎へて呉れるけれど、さつ女と仙六はろくに見向きもしない。

堪りかねて又江戸へ戻つて来る。けれどやはり故郷は忘れられない。翌文化五年の七月には祖母の三十三年忌を機會に約半年を郷里に過しては、又放浪の生活を戀ふやうに江戸にかへつてゆく。

庵の貧しい乏しい日暮しをしたり、友人の成美の家に居候をしたり、俳友を訪ねて近國を流浪することが、それから五十に手の届くまでの彼れの生活であつた。

雪の日や古郷人のぶあしらひ。

心からしなのゝ雪に降られけり。

冷めたい雪を踏んでわざ／＼歸郷してみれば、繼母と仙六の氣のない待遇にすつか

り冷えきつた文化四年暮の心懐であつた。

家なしも江戸の元日したりけり。

門々の下駄の泥より春立ちぬ。

草の戸やどちの穴から春が来る。

大江戸や藝なし猿も花の春。

壁の穴我初空もうつくしき。

貧しい身にも、元日の豊かさはある。けれど其處には淋しさがすぐ其の後に襲うて

来る。

とてもなら餅につかれよ庵の草。

梅咲くやあはれことしももらひ餅。

夕暮や親なし雀何と鳴く。

夕暮や雀のまゝ子松に鳴く。

よるとしや櫻のさくも小うるさき。

老ぬれば櫻も寒いばかり哉。

ちる花や已におのれも下り坂。

ほの／＼と乞食の小菜も咲にけり。

春も淋しかつた。繼子としての僻みがよりひどく彼れを淋しがらせるし、五十に近

づくにしたがつて老を身につく。感ずるやうになつてゆく。花も寒い小うるさい。

八

よるとしや涼しい月も直あきる。

能なしもどうやらかうやら更衣。

生て居るばかりぞ我とけしの花。

古郷やよるもさはるも茨の花。

夏が来ても人並の涼しさは味へなかつた。月も更衣も臆劫であつた。唯生きてゐると云ふにしか過ぎない。折角の歸郷も故里人のとげくしい心に彼はいよく人生の不快を想ふのであつた。

なか／＼に人と生れて秋の暮。

秋風やあれも昔の美少年。

の 行あたりばつたり雁の寢所哉。

行く年や身はならはしの古草履。

木がらしにしく／＼腹のぐあひ哉。

秋と冬が冷たくやつて来る。其處にあるものもやはり冷たい、淋しい、覺束ないものばかりである。彼れの心はもう放浪に飽いてゐる。漂泊するためには彼れの身は餘りに弱く餘りに老ひて来た。

文化九年。彼れはもう五十かつきりになつた。五十の年をとつてみて彼れは心から感慨の深いものがあつた。

五十年踊る夜もなく過ぎにけり。

五十年あるも不思議ぞ花の春。

おのれやれ今や五十の花の春。

と詠つて、

○ 月花や四十九年のむだ歩き。

と過去の無駄骨折を悔ひながら、

○ 斯う生きて居るも不思議ぞ花の蔭。

と、五十にも春のあることを怪訝に思ふのであつた。

けれど、

○ 是がまあつひの栖か雪五尺。

と、故郷に骨を埋めたい希望が老ひた彼れに沸々と湧き上つて來るのであつた。たとひ誰が何と云はうとも、其れがつひに荆棘の中であらうとも、彼れの老後の安住地はどうしても信濃の山奥の舊里でなければならなくなつた。彼れの身も心も、もう故郷から一步も離れがたくなつた。

六月十八日に江戸を立つて、今迄捨てゝあつた遺産分配履行の背踏のために國へ歸つた。直ぐ江戸へ歸府して又間もなく十一月の末に再び故郷の人となつてゐる。家へは立寄らず他に寄寓して問題の解決に當つたのであつた。

年が暮れて新年を迎へても話は纏まりさうにもなかつたので、彼れは業を煮やして公儀の沙汰にさへしやうとするのであつたが、やうやく人の仲裁で解決されることになつた。

「彼れがかくまで、彼れに似ず父の遺産に執着をもつたのは、其の慾望を満足するた
めではなかつた。彼れに許されたるものを享けやうとするのみであつた。それのみで
はない、寧ろ家にさへあんなに無頓着であつた彼れが、この深い執心はこの遺産にも
つたことは、彼れの心がこの地に最後の安住を求めたかつたからであつた。」

長の面倒を見て来た問題も解決せられた。家なき彼れに父の家の半が興へられ、財
なき彼れにはじめて父の財の半が恵まれたのであつた。

自ら乞食と云ひ、又そんなに思つて居た一茶に家と財が、しかも愈々それが無くて
はならぬ時になつて興へられたことは、彼れには天裕と云つてもいゝであらう。

餘所並の正月もせぬしだら哉。

と、僻がんでゐた彼れも家と財とを得てからは、春には、

見かぎりし故郷の櫻咲きにけり。

と眼を聳立て、

一人前田も青ませて夕木魚。

と静かな夏の生活を悦び、

朝々の心ををがむ青田かな。

と、財ある今を感謝してやまなかつた。

けれど、

陽炎に成つても仕舞へ草の家。

古郷やいびつな家も一かすみ。

芭蕉様の躑をかちつて夕涼。

下々も下々下々の下國の涼しさよ。

大の字に寝て涼しさよ淋しさよ。

蚊いぶしもなぐさみになるひとり哉。

五十年聞きも聞いたよかんこ鳥。

親といふ字を知つてから秋の暮。

ろそ寒や親といふ字を知つてから。

十ばかり屁を乗に出る夜長哉。

下駄からり〜夜永のやつら哉。

あばら骨なでじとすれど夜寒哉。

死こぢれ〜つゝ寒さかな。

しぐるゝや家にしあらば初時雨。

○一茶坊に過たるものや炭一俵。

と、この年に詠んだものを拾つて見ると、其處には前には見られなかつた心の平和

は漂つてはゐるけれど、やはり又其處に足らはぬものが見出されて来る。一人住の淋

しさと、充たされない肉親の愛と、そして其れについての微な僻みとであつた。

勿論この年の六月には、善光寺の俳友の家にて癩を病み、七十五日の療病生活をし

て、一時は死を覚悟する位悲觀もしてゐたので、

入らば今ぞ草葉の陰も花に花。

と、観念の程をさへ示してゐる。其故か其年の秋冬はよほど身にこたへたらしい。

彼れはどうしても一人の生活には堪えられなくなつて来た。翌文化十一年には五十

二歳を數へたのであつたが、父の遺言でもあり、自分の唯一つ残された望みでもあつた結婚を思立つことになつた。

「二十八歳のきく女が彼れの花嫁として迎へられたのは其年の四月であつた。家と財と嫁と三拍子揃うて、五十二歳の花婿は、有頂天の悦びを満喫することが出来た。

○ 久方の花掣屋よ掣屋よ。

と、くすぐつたい自分を抓つて見る。

逃げしなや水祝はるゝ五十掣。

と、若がへつて、

○ 足枕手まくら鹿のむつまじや。

と、ちと露骨過ぎるところまで云はずには措けなかつた程悦びが溢れてゐる。

きく女を得た彼れは江戸を根城とした俳三昧の漂泊の生活を閉ぢて、地味な家庭の人となることを決心して七月には江戸に出で、多くの俳友と訣別し、其年の十二月には山深きこの里に全くの家庭人となりおほせた。

うす墨のやうな色でも初空ぞ。

我里はどうかすんでもいびつなり。

木の端のおれが立ても臍也。

庵の梅よん所なく咲にけり。

何のその花が咲かうと咲くまいと。

きく女が來るまでのこの年の春は、やはり淋しい春であつた。心の僻みが自然物にさへ擴がらうとしてゐる。

くら住や田螺に似せてひとり蚊屋。

このひとりは、もう僻みでなくなつた。轉輾してきく女を思ふのである。

九

一茶が願ふた家庭はきく女の奉仕によつて恙なく彼れのものとなつた。彼れは今悦びの頂點にある。けれども果して其れは彼れの望んだごとく幸福であつたか。

盈つれば缺ける。いやさうのみではない。缺ける位ならまだ辛棒も出来ることもあるであらう。缺けた缺らが却つて仇となることもある。一茶は晩年の計を圖りそこねはしなかつたか。この結婚の故に彼れは幸福にならなかつたのみか、彼れの身に餘る重ひ負目を脊負はされたのであつた。

文化十三年には長男混藏が生れて死し、其秋には旅に病んでゐる。翌十四年には二男千太郎が生れてすぐ死んでゆく。其翌文政元年には長女さとが生れ、二年にはさとも世を早うする。三年には三男石太郎が出生したけれど、彼れは軽い中風に罹つてゐる。四年早々石太郎も死んでいつた。翌五年に四男金三郎は生れたが、六年には最愛の妻きく女と永訣せなければならなかつた。ついで金三郎さへ其の跡を追つたのである。

七年になつて雪女を後妻に迎へて一時の安堵はあつたが、氣に入らずに三月にしてすぐ破鏡の苦をなめ。八年姥櫻のさと女を三度の嫁として二年、家は焼け、土藏に住まひ、中風に悩みつゝ腹の子の顔も見ず文政十年十一月十九日、六十五歳で他界するまで、其處にあるものは、苦の重疊でしかないではないか。

思はず飲下した苦杯は餘りにも彼れを無残に苛んでゐる。彼れはこの人生の悲境を
老と共に悩みぬいたのであつた。

反故風のあたり拂つて上りけり。

稗餅にあんきな春が來たりけり。

庵の餅雪より先に消えにけり。

春がすみいつち小さいぞおれが家。

さあござれこゝ迄ござれ雀の子。

しよんぼりと雀にさへもまゝ子哉。

門の梅不性く々に咲にけり。

妻なしは草を咲かせて夕涼。

あら涼しすゞしといふもひとり哉。

としよれば犬も嗅ぬぞ初拾。

形代も吹けば飛ぶ也軽い身は。

我が昔の花さへ盛り持にけり。

又ことし死損じけり秋の暮。

下冷よ又上冷よ庵の夜は。

次の間の灯で飯を食ふ夜寒哉。

垣外へ屁を捨に出る夜寒哉。

我家の一つ手拭氷けり。

うす壁にづんづと寒が入にけり。

○ 繼ツ子や指をくはへて行く時雨。

とくとけよ貧乏雪とそしらるゝ。

うら壁やしがみ付いたる貧乏雪。

放れ鴛鴦一すねすねて眠りけり。

彼れが妻を得たことによつて温められた心は、次々の不幸によつてすぐ冷まされてゆく。彼れがもつて生れたやうに本性となつた僻みは、又それにつれて現はれて來る。貧に對する僻みが強く現はれてゐるが、其れはやがて生活の咀ひの影を濃くしてゆくであらう。自嘲の心も其處に見えても來る。世の繼子としての自分の自覺が又繼子であつた自己の不運と共に回想せられても來る。
これが彼れの晩年の文政に入ると、

元日も立のまゝなる屑家哉。

あら玉の年立かへる虱かな。

春立つや愚の上に又愚にかへる。

あばら家や其身その儘明の春。

吹けばとぶ家の世並やメかさり。

つんとして飾りもせぬやでかい家。

すゝけ紙まゝ子の虱と知られけり。

○ まゝつ子やつぎだらけなる虱。

まゝ子虱つぎのいろ／＼見えにけり。

春風のそこ意地寒し信濃山。

霞かすむならかすめと捨すてし庵いへかな。

一引ひとひきや下手へたな霞かすもおれが家いへ。

鶯うぐいすも親子おやこづとめや梅うめの花はな。

燕つばくらもおれが門かどをば嫌きらふげな。

又またむだに口くち明あく鳥とりのまゝ子こかな。

から口くちを又またも明あくぞよまゝ子こ鳥どり。

瘦やせがまんして咲さきにけり門かどの梅うめ。

まゝ子こ花はないぢけ仕廻しまもせざりけり。

花はなの木きのもつて生うまれた果報くわはう哉かな。

我門わがかどに瘦我慢やせがまんしてさく椿つばき。

ひとはなに憎にくまれ草くさの青あおむなり。

遊女うしろよめが見みてけつかるぞ暑あつい舟ふね。

繼つぎッ子こや涼すずみ仕事しごとに藁わらたゝく。

飯櫃いひびつの簾すだは青あおき屑家くずや哉かな。

今見いまみればつぎだらけ也なりおれが蚊屋かや。

新あたらしき蚊屋かやに寝ねる也なり江戸えどの馬うま。

故郷ふるさとは蠅はへまで人ひとをさしにけり。

茨はらの花はな爰こゝをまたげと咲さにけり。

うかゝと人ひとに生うまれて秋あきの夕くれ。

行ゆくな雁住かりすめばどつちも秋あきの暮くれ。

小言いふ相手のほしや秋の暮。

寝むしろや風わすれてやゝ寒き。

唐紙の引手の穴を秋の風。

名月や五十七年旅の秋。

名月も御覽の通り屑家哉。

身の程や躍つて見せる親あらば。

○ 繼ツ子は砧に馴れて寝たりけり。

終の身も見事なりけり枯野原。

○ しんくとしんそこ寒し小行灯。

ひいき目に見てさへ寒きそぶりかな。

うしろから寒が入る也壁の穴。

木がらしに吹ぬき布子一ツかな。

と、やはり貧と世の繼子扱ひに扱てはゐるけれど、そこにやゝ僻みの餘裕が見えてゐる。僻みが僻みとしての意味を持たないで、一つの藝術味さへ示すやうになつてゐる。彼れの自嘲も、彼れの拗ねも、彼れの卑屈も、こゝまで來れば人間一茶の自畫像として美しい色彩をもつて、人として悪なるものと考へられるこれ等のものが却つて輝いて來る。彼れの僻みはやはり彼れの人としての確な一つの藝術であつた。

愛に惱める一茶

われと来て遊べや親のない雀。

僅か三歳で母親に死に別れた一茶は、その淋しい心持を顧みてこの一句をなしたのである。母親の限りなく深い愛、そして母親を慕ふ底知れぬ懐しみ、そこに無絃琴のやうに奏でられるのが親子の愛のシンフォニーである。

故知らず慕はしき母の愛が、其の死によつて、三歳の頑是ない彼れから、突如として奪はれてしまつた。かゝる惨らしいことが、又と世にあらうか。よち／＼歩き出し

たばかりの子供から母を奪ふほどの悲惨は、寧ろ運命の殘虐と云つていゝ。

無心な子の一茶が深く剝られたこの殘忍のメスによつて、その根性に一生拭ふことが出来なかつた僻み心を植ゑつけたのもこの時からであつた。母の愛が拒否せられたことによつて、その愛を取戻すための彼れの不斷の努力が、一方に於ては僻みとなり他方に於ては愛のより深い要求となつて現れなければならなかつた。

彼れの生涯が愛憎の劇しい一生に終つたやうに見えるのは、確に其處に根ざしてゐるのであつた。愛するものは何處までも愛し、憎いものは無性に憎かつた。この相反する二つのものゝ深い溝に生涯の彼れの悩みが悩みぬかれたのであつた。

かくのごとく彼れはすばぬけて愛を欲するものであつた。僻める彼れは、強烈なる愛の酒を求めて其れが満足されない處に、彼れの拗が増長していつたとすれば、彼れ

は寧ろ悲しき愛の巡禮者と云つていゝのであつた。

母の愛が奪はれてから、父と祖母の愛が其れに代つて強く注がれていつた。しかし母の乳房から白い愛の流れが柔かく彼れの全身の隅々まで血のやうに行亘るのに較べると、何となく物足らぬものがあつた。其處に未だ覺えたことのない淋しさを感ぜずにはゐられなかつた。

この淋しさを充たすために彼れの眼は自然と他に向はなければならなかつた。近所の子供達と遊んでも心好く遇して呉れない。そのみではない。母無し子に對する侮辱あへ浴びせられる。他に愛を求める彼れの心は子供仲間にもそれを求められないで却つてそれ等に憎しみを感ずることにさへなつてゆくのであつた。

われと來て遊べや親のない雀。

彼れの心は何日しかかやうなものに向けられてゐた。人に近い生處にある鳥獸に自分の悲しみを移し、其處から彼れの淋しさを癒やす温かいものを吸収しやうとしてゐるのであつた。彼れの愛が、不思議にこれ等のものに注がれ、しかも彼れの終生の愛の對象として、これ等のものが選ばれてゐることは、この幼い愛の巡禮者時代の習性が生涯のならばしとなつていつたのであらう。

化るなら手拭かさん猫の戀。

下りよ〜野火が付いたぞ鳴く雲雀。

片里や宿なし乙鳥暮いそぐ。

かへる雁翌はいづくの月や見る。

雁起よ雪がとけるぞ〜よ。

雁行かりゆくな今錠いまじやうあける藪やぶの家いへ。

雁行かりゆくな小菜こなもほちやくほけ立たつに。

雉きじ子こ鳴なくやきのふ焼やかれし千代よの松まつ。

瘦やせたりな子こにつかはるゝ門かど雀すずめ。

夕暮ゆふくれや親おやなし雀すずめ何なんと鳴なく。

夕暮ゆふくれや雀すずめのまゝ子松こまつに鳴なく。

雀すずめ子こやお竹たけ如來にょらいの流ながし元もと。

さあござれこゝ迄までござれ雀すずめの子こ。

しよんぼりと雀すずめにさへまゝ子こ哉かな。

雀すずめ子こやそのけく御馬おんまが通とほる。

むだ鳴なきになくは雀すずめのまゝ子こ哉かな。

又またむだに口くち明あく鳥とりのまゝ子こかな。

から口くちを又またも明あくぞよまゝ子こ鳥とり。

夕月ゆふつきや鍋なべの中なかにて鳴なく田たにし。

瘦蛙やせかえるまけるな一茶いちさ是こゝにあり。

蝶てふ小こてふあはれ疲つかれて歸かへるかや。

やよや蝶てふそこのけく湯ゆがはねる。

蝶てふの身みも業ごふの秤はかりにかゝる哉かな。

氣きの毒どくやおれをしたつて來くる小蝶こてふ。

それ虻あぶに世話せわをやかすな障子窓しやうじまど。

前まへの世よのおれがいとこか閑古鳥かんこどり。

つかれ鶉うらや子こをふり返りかへ〜。

はなれ鶉うらが子この泣なく舟ふねに戻りもどけり。

まつて居ゐる妻さい子しもないか通とほし鴨かも。

蜘蛛くもの子こはみなちり〜の身みすぎ哉かな。

だまれ蟬せみ今いま髻ひげどのがござるぞよ。

庵いほの蚤のみ不便ふびんやいつか瘦やせるなり。

〇 よい日ひやら蚤のみがをどるぞはねるぞよ。

追おふな〜追おふな子こどもよ子持蚤こもちのみ。

〇 やれうつな蠅はへは手てをする足あしをする。

世よがよくばも一つとまれ飯めしの蠅はへ。

行ゆけ螢ほたるとく〜人ひとのよぶうちに。

出でよ螢錠ほたるぎをおろすぞ出でよ螢ほたる。

とべ螢野ほたるのら同前どうぜんのおれが家いえ。

とぼ〜と足あしよ雁かりの一つ哉かな。

連つれのない雁かりよ来こよ〜宿やどかさん。

なけ鶉うら邪魔じまなら庵いほもた〜むべき。

寒さむいぞよ軒のきの蝸唐ひぐらしちがらし。

出でて行ゆくぞ仲なかよく遊あそべきり〜す。

〇 又またも來くる膝ひざをかさうぞきり〜す。

妻やなきしはがれ聲のきりくす。

數限りもない愛の讃歌である。見て悦ぶのではない。それと共に生き、それと共に愛しあふのである。一茶は、淋しい一茶は洵にいゝ伴侶を生涯もち得てゐる。

二

八歳の年に繼母のさつ女が来るやうになつてから、淋しくなつた彼れの母の愛を更にさびれさせていつた。その上に十歳を迎へて異母弟仙六が生れてからは、さつ女の繼子虐めは人の目にさへ餘るやうになつた。彼れの母への愛は最早其の根まで涸れてしまつて、憎しみ、僻みがそれに代つて沸々と彼れの心に湧くやうになつた。

父と祖母は人がよかつた。一茶の虐められるのを見て心には泣くけれども手の下し

やうはなかつた。唯傍觀してゐるより他に仕方がなかつた。

十四歳になつて、この貧しい間柄を見るにみかねた父は手放しがたい彼れを江戸に追ひやることによつて、彼れの家の平和と二人の幸福を希ふのであつた。しほ／＼と家を出でゆく孫の姿を見て祖母は涙に暮れるのであつた。父はさすがに涙は見せなかつたが、卒禮まで見送つて、

あはれ餘所の親は、今三とせ四とせ過ぎたらんには、家をまかせ汝にも安堵させ我等も行末をたのしむべきに、年齒も行かぬ瘦せ骨に荒奉公させ。

と心に泣いてゐるのであつた。そして愈々其處で別れる時に、

毒なるものはたべなよ、人にあしざまに思はれなよ、とみに歸りて健かなる顔をふたゝび我に見せよや。

と其の聲も顫ふてゐるのであつた。

祖母と父との愛は、母なき後、彼れには身に泌みて嬉しかつた。繼母の陰になり表になつてさつ女の顔に氣兼ねながら、彼れを庇つて呉れたいぢらしいこの人々の愛は彼れの心に銘じてゐるのであつた。

江戸へいつて放浪の生活はしてゐても、靜かに彼れの臉に映るものは、臃げな母の面影と、そして父と祖母の姿であつた。憎いさつ女の仕打ちを思ひ出しては、自分を江戸三界まで追はねばならなかつた父の氣苦勞を氣の毒に思ふのであつた。

天明七年にはすでに好きな俳人の群に投じてゐた彼れは、二六庵の門下にゐたが、寛政二年師竹阿の死によつて、其門を辭し愈々獨自の道を進まふと決心し、其翌年春早速江戸を出發して彼れの最初に目指した處は、夢寐にも忘れ得なかつた父の健在す

る信濃の故郷であつた。

寛政三年春のころ、しきりに夢見の悪ければ、故郷の親そゞろ心にかゝりて彌生

二十六日大江戸を發足して、皐月十八日といふに故郷にかへりて、

門の木も先づつゝがなし夕涼。

とは、老父めでたくおはす事のうれしきあまりにかくなん。

二十九歳にもなつた彼れが、十五年振りに歸郷した時の父の悦びはいかばかりであつたらう。略一年近く父のもとにあつて、繼母のさつ女がゐるにせよ、故郷の風物にひたることが出來たのは彼れの忘れ難い幸福であつた。

翌寛政四年には新春を迎へて一茶坊と名を改め關西の長い旅に立つたのであるが、それも父の代參として京の本願寺へ詣るためであつたと云ふ。

旅の癖のついた一茶はこの旅を了ると又旅々々と常に旅をたのしんで居た。旅はたしかに彼れを養つて呉れた。彼れの俳魂は旅によつて肥えてゆくのであつた。その旅の間でさへやはり彼れの頭に常に往來するものは故郷の父のことであつた。

父ありて母ありて花に出ぬ日哉。

○初夢に故郷を見て涙哉。

父を憶へば何がなし涙が流れるのであつた。

丁度寛政の末年即ち享和元年。何となく故郷が氣になつて久々で父を訪れることになつた。四月はじめであつたが、夏らしい山々の氣にひたりながらあかす眺め暮してゐるうちに、ふと其の二十三日から父は傷寒を病んで床につくことになつた。六十九歳の老齡である。

病が熱病であるので、経過が面白くなかつた。彼れは心根をつくして枕頭を去らず看病のまことをつくすのであつた。父のみとり日記は其の時の彼れの偽らざる告白であつた。

四月廿三日。晴。

この日は清和天雲なく晴て、山ほととぎすのはつ音告渡る日、父はなすびの苗などに水などかけておはしけるに、なにとおぼしてんや、破冉青陽の日なたをうしろにうけていましたける。一茶云いかなればかゝる淺ましき所にうつぶし給ふらんと抱き起し侍るに、蓬の下の土となり給ふ前表なりと後に思ひしりたり……いさゝか心ちなやましようとなんありけるに、急發熱さかんにして、膚は火にさはるがごとくなれば、飯を進むれども一箸も喉に通らず。こはいかにとひとりおどろ

き、魂を消すといへどもせんすべなく、只もみさするより外はなかりけり。

廿四日。晴。

友がき竹葉のもとより薬を貰ふて進めけり。

廿五日。曇晴。

病日にく重りて、けさは重湯も通らず。

廿六日。晴。

野尻の里迅碩を請待して診せしむるに、脈は裡にひづみて、いはゆる陰生の傷寒なれば快氣も萬にひとつなるべしとたのもしげなく云はる。心も轉倒して允に空しき舟に乗れるがごとく……。

廿七日。雨。

いとど淋しきに雨のふりまさりてくらしかぬる……。

廿八日。晴。

祖師の忌日なり……御佛にむかひ常のごとく看經なし給ふに、御聲低う聞ゆるいかうおとろへたまふ後姿心細くおぼゆ。

廿九日。

父は病の重なりたまふにつけて、孤の我身の行末を案じ給ひてんや。いさゝかの所領はらからと二ツ分けにして與へんとて、くるしき息の下より指圖なし給ふに……仙六心に染まざりけん、父の仰せにそぶく。其日父と仙六いさかひして事止みぬ。……いかなれば不顧親養一任他五濁惡世の人界淺ましき事なりき。此夜は別して脈あしければ……父の心に叶はざる弟なれども……血を分けたる子

の事にもあれば……弟の心を思ひやりて父の傍らに寝させつゝ、灯のかけに寝顔をふりむけて、父の寝すがた守り居たりけるに……見るも心いたましく……。

五月一日。

空晴れわたりて、麥は穂のいそがはしげにそよぎ、百合も俄に紅白の色をあらはし、世の中は田植、早苗とりとひしめきあへるに、常健なる父の起もし給はぬ御有さま、はがゆげに見へて、唯日永きに晝頃より、まだ日はくれぬかとかまけらるゝに、思ひはかりてあはれ也けり。

二日。

變起りていとくるしびたまふに、母例のあらがひに見もしむきもせず。弟は分地此かた父の中よろしからず。……父は一茶の夜の目も寝ざるをいとをしみ給ひ

て、晝寝してつかれを補へ、出て氣はらせなど、和かきこと葉をかけ給ふにつけても、母は父へあたりつれなく、父の一寸のゆがみをとがめて、三従の戒をわすれたり……。

三

三日。

迅碩はおのれがじにては、薬も得とどかさるむね告たりけるに、今迄神佛ともたのみし醫師にかく見はなさるゝ上は秘法佛力を借りて……と思へども、宗法なりとてゆるさず。……さても果ぬ事なれば、善光寺の醫師道有をまねかまほしく、とみに人を走らせけり。……日入果てゝ門々に灯ともす頃、やゝ駕の見へければ

とみに病人を見せしむるに迅碩がいへるごとく、よろづに一つも此世の人とは見へずとなん云はるゝ……。

四日。

きのふに打替りて貌うるはしく、何ぞたうべたきなど云はるゝに、うれしさかぎりなく……かたくりなど……腕に三ツ四ツ三ツすゝり込み給ふ。道有も此おもぶきにて變の來らざれば、ほどなく快氣なるべしとなん云はるゝに……安堵のおもひなしぬ。……

六日。

藥相應したりければ、しばし進め參らせ度炭火煽ぎつゝ、心ちよげに寝すがた侍守り奉るに、貌色うるはしく、脈をうかゞふに一ツとして不足なければ十に

九ツは本腹ならめと祝ひ侍けり。

六日。

天晴たれば伏してばかりも退屈にやおぼしめさんと、夜着打たゝみてよりかゝらせ申したりしに、こしかたの物がたりなど初め給ひけり……。としはもゆかぬ瘦骨に荒奉公させ、つれなき親とも思ひつらめ。皆是すぐせの因縁とあきらめよや。今年は我も二十四輩に身をなして、かの地にて一度汝に巡りあひ、相果つるとも汝が手を借らんとおもひしに、こたびはるゝ來りてかゝる看病こそ淺からざるゑにしなれ。此度は往生とげたりとも何の悔かあらんと、はらゝと涙を落し給ふに、一茶はたゞ打ふして物も得言ず。夏の消えやらぬ不二の雪より厚く、紅の二入より深き父の恩を、つき添う事もなくて、只うかめる雲のごとく

東にあるかと思へば、西に漂ひ、光陰は坂上に輪をころかすごとく、今とし二十五年になりぬ。首は白霜をいたゞく迄親のそばを遠ざかりゐる事、五逆罪とも是に過ぎてんやと心にふし拜み……貌おし拭ひ打笑ひ……我元の彌太郎となり、草ぎり土ほりて心を安んじ、今迄の爲體ゆるし給へといへば、父はかぎりなく悦び給ひき。

七日。晴。

……夏の日のつれづれにのみおはしければ、何ぞたうべたきと、……梨一つ参らせたくは思へど、……野もせ山もせ夏寒き風の吹くのみなりき。早速梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたきとむづかりたまへど、毒ありとてゆるさず。あはれいつの日か毒斷のなき人にして見まほし。……

八日。晴。

……

此よは子の刻ひとつの頃より寝られねば、夜永うおぼし、いまだ夜は明ぬか雞は啼かざるかと……あはれ、雞の空音を作りて關の戸の明しためしはあれど……火を袋に入る幻術は知らず。入日を返す勢もあらねば、只ともしびをかゝげて寝貌を守るばかり也。

十日。晴。

しきりにありの實をたうべたきとむづがり給へば……聞盡し尋ね探し盡すといへども……夏さへ淋しき山里なりき。けふは藥のたへ間なれば善光寺へ行まほしく曉に支度して門を出るに、……辰の刻ばかりに善光寺に着く。……とみに病の

さまをかたりけるに、やがてかうかへのじもて御藥合せて賜はりけり。……………。
はた梨を捜しに來つるなれば、……天をかけり地を潜りてなりとも、……足を空
にしてかけ巡るに、悲しさは片われ一つありともさかゆる一ツもなかりき。昔、
雪中に筍掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、我梨一つ得ることあたはず
るは、光天我を捨て給ふや……………。

十一日。

……父……のたまはく、……此家のものども汝と我とを、敵のやうにさからひ或
はのゝしる。我命ながらふる中は、我身に替りて汝をすくへばこそ、一日半時も家
に居られぬ。我が亡迹にしもならば、いかで彼等に敵しがたからん。日々夜々修
羅のくるしみたへざらぬ。其時、汝又我遺言もかへりみず、他國せんは鏡の形を

うつすより明か也。生とし生るものゝ病難死苦はのがれがたし。汝足なへこしか
どまりて古郷にもどりたらんは、家のうからやからはさみつる事よと犬猫よりも
浅ましく、下墨のゝしられたらんは、草葉の蔭にてもいかばかりかなしくやあら
んくやしくやあらんと、涙はらくと落し給ふに、一茶もキスイ涙に打ふして、
誠の親なればこそかゝる孤のふつゝかなる身を憐れみ給はぬ。……………。

十二日。

病人水を好み給ふ事しきりなるに、……水を煮返して進めけるに、水ぬるしとて
むづがりたまふ程、熱のくるしみさこそありつらぬ。しかれども、いかでか毒を
進め奉るべき。……母は毒をも返り見ず、井水を天目に三ツ四ツつゞけてしゐら
るに……いしくも一茶は我をたばかりける哉とむづがりたまふ。……枕元につき

添ひて目前の非なる事みすく諫むる事あたはざるは、是非もなき事ども也けり。……。

十三日。

……酒たうべたきと云はるゝに、……全快迄は進めまじと思ひしに、……透を見
て魔を入れんとおもふ人達……病人の好まるゝに任せて、……進めらるゝ。病人
は渡りに舟得しやうに、……朝の間に五合斗りかたぶけ給ふ。一茶ひとり手に汗
をにぎるといへども二人に敵しがたく、遂にいさむるにかたかりき。……。

十四日。

かくてけさの貌見奉るに、……貌のむくみこそ心得ね。……又酒ほしとなんの給
ひけり。……延引せずとはやく出せとむづかり給ふ。今は諫むるにこと葉なく、

しからば椀一ツとりかひて参らすに、舌打して吞給ふありさま、……父の咽を干
すやうに傍らなる人はいへども、火をもて薪をさかんにするがごとく、熱に酒も
て病を長増さするよりはまさりぬべき。

十五日。

御貌のさま心にかゝれば、……はやく醫師に見せまほしく思へども、……床にあ
りながらともしび影ほのかに、稱名の聲となへたまふ聲の常に替りて聞ゆるこそ
何となく心ぼそけれ。……。

四

十六日。晴。

心にかゝるは貌のむくみ也。さりながら訪ふ人のあるが中に、ゑやみは廿日過ぎぬれば氣づかひなし。かく日立ぬればつゝがなし。心をたしかにいたわれと云へる人、又ある人枕元により添往生の大事忘れ給ふなど念佛を病人に進め、おのれもたかくととなふる人あり。父の本復うたがひなしと力を添ふる人は、詞のつやながらも、うれしく、往生をすゝむる人は、誠かはしらねどもうらめし。……家内の輩弟を始めとし、父は今往生とげられなば、よき世の仕舞などとさゝやきあふ。……

十七日。

日々貌のむくみ、又心にかゝるは咽の痰のころゝとなるのみ也。

十八日。

夜明いさゝか心よくやおぼすらん。……例のごとく夜着打重ねぬれば、やゝしばらく……もたれて又よこになりたきとなんの給ふ。……一茶は例の御足もみて居たりけるに、父はふと目をさましたたまはく、汝、此度は長々晝夜の介抱過分也。深き父子の縁にしあればこそかゝる時におりあふならめ、必ず心勞なりなどと思ひくれなよと、さめぐととおぼすに、かく命またくありけるも皆親の恩にしあれば十とせ甘とせかゝる病におはすとも、親に對して、なじかは拙き心ばへを持つべき。心しづかに本復なし給へといへば、……一世の重病にあれば今もしれがたくわれ往生ばしとげなば、我申通妻して、汝も此國を遠ざかることなかれ、……そぶくなとおぼすに……必ずうしろやすくおぼしめせとなだむれば、又すやくと眠り給ひぬ。

十九日。

……けさは湯水も好み給はず。かんばせのやうもたのみとおもふ色つやもなかりけり。書過より病變じて、……木の佛を横になしたるごとく、すやくと眠り給ふばかり也。……夜も五更とおぼしき比……父うるはしく目をあき給ひ、いいなん、連れて歩め、と云はるゝ、いづくへばし行給ふらんと問ひければ、いふにやをよぶ、至心信樂欲生我國と、病なき時の聲のごとくたから〜になへたまふ。……

廿日。

……晝頃より御貌のけしき青々と目は半ふさぎ給ひ、……いづる息引くいきに啖はころ〜と命を責め、……よろづたのみすくなきありさま也、あはれ、おのれ

命に替へて一度は、すこやかなる父にして見まほしく、……今は……只念佛申すより外にたのみはなりき。……

廿日の月は窓をてらし……八聲の雞も遠く聞ゆる頃は、しきりに息の通ひも低くなり……痰はしば〜咽をふさぐ。……しほ〜と手を空しくして、いまはの時を待つのみ胸のくるしび、かなしびを、天神地祇もあはれみもなく、夜はほがらかに明か〜り、卵の上刻といへる頃、眠るごとく息たへさせ給ひけり。……おとつゝい迄は父といどみあひ、いさかはれし人達も屍にとりつき、涙はら〜と流して稱名の聲くもりがちなるは、さしも借老同穴のちぎりのいまだ盡せざりしとは、今こそ思ひしられたり。

廿一日。

法師は鹽崎てふ里にして、行程九里の巷なれば葬は、翌廿二日……。

日は片壁に横はり、夕を告ぐる山鳥は西山さして飛かへり、無常の聲の入相は皆人々の上にひゞき、……常に見る灯のかけさへも物たらぬやうに思はれて是さへかなしびの員とはなりぬ。

今よひは誠のなごりと思へば、父の屍に添寝して香のけぶりのたへたる時は寝すがたを情ながめ奉るに、おとついの朝、笑ひながらこしかた、行末の物がたりありしが、今よひの今は空しき屍と變じ給ふ。おもへばおとついが笑ひ貌の逢納めなりき。……今夜の明がたが一世の別れ、翌のかなしびはいかならんと思へば、胸もふさがり魂つぶれて、人なき國にしあれば、誰はよからめ紅涙は目にさへぎつてねぶられず、死貌守り居たりける。今迄長きとおもひし夜も、

今夜はすらく明けにけり。

五

廿二日。

ちかしき人はよりつどひ、うれたき屍は棺に納めて、今はむなしき佛さへ後のうはさとはなりにけり。うたてうき世のありさまなりき。あはれ我は此家の宗領と生れながら、いかなるすぐ世の縁にしあればや、親につき添ひ仕へ奉らん事叶はず。……親の財寶を損じたるにもあらざるに、前世に世を讒したるむくひに、天より拙き性を下し給ふにやあらん。一寸の孝を盡さんとすれば、直に一尺の魔のそねみにあひ、小鹿の角のつかの間も家の治まる時しなかりき。……十四

歳の春の曉しほく家を出し時……しかしてより此かた、我は諸國わたらひを業として、……念々不住猶電光、我も頭に霜をいたゞく迄、あるとある山々浦々を宿として日をおくる境界、もしは木のあるにもあらぬ山のおくに、むもれ木の道しらぬ里にしあらば、父の一期は夢にもしらすじ。此度ふしぎに巡り來りて、病の始終守るてふは、ゆかりの綱いまだきれずやあらん。……是のみ生前の面目なりき。

けふも申の刻ばかりに木々のむら雨しばらく晴れて、草の雫に夕日うすづく頃、やゝ鹽崎の導師來り給ひて、今は野おくりの時とはなりぬ。……我は山吹のいはぬ色なるかなしび隠さんとすれど、涙はしのぶによすがなく、道も遠からねば棺は草のたかみに居へて、香をひねる手の力さへ夢幻のやうにおぼへける。導師

のグハンキシクドクと共に棺は煙と成りにけり。有爲轉變のありさま也。

廿三日。

曉、灰よせなりとて、おのく卯木の箸折て仇し野にむかふ。けさは俤のけぶりさへ消へて、只誠なるは松風の凄々としてふくのみ也。三月のゆふべは逢ふて祝ひの杯をいたゞく、けさの曉は別れかなしき白骨を拾ふ。キドアイ樂はあざなへる繩のごとく、あへば別るゝ世の中、今更おどろくべき事にはあらねど、今迄は父をたのみに古郷へは來つれ。今より後は誰を力にながらふべき。心を引かさるゝ妻子もなく、するすみの水の泡よりもあはく、風の前のちりよりもかるき身一つの境界なれど、只たゞきれがたきは玉の緒なりき。

生残る我にかゝるや草の露。

……夜は……ともしびの明きにつけても床の邊のなつかしく、あからさまに寢給ひし父の目覚むるを待つ心ちして、なやみたまふ貌は目をはなれず。よび給ふ聲は耳の底にのこりてまどろはめば夢に見え、さむれば佛に立添ふ。

……………

行水ふたゝびかへらず、石の火にかへらず、八千度いかにくゆともかひなき事にしあれど、たのみとおもふゆかりも皆かれ果て、しらぬ國へひとり放たれしごとく、便なき孤の一茶が心内、思ひはかられて哀れなりき。

廿八日。

初七日？なれば、父のいまぞかりける時、我に妻むかへして、とどめよと人に云ふ、おのれにも戒められしが、ある人の中に聞かぬふりに空耳したる人あり。こ

とに六欲兼備の輩、遺言にそふか、はた顔あかめあふことの本意なさに、又元の雲水と成りていかなる岩木のはさまにも身をひそめ、風をいとひ雨をしのがんにも、するすみの身一ツ何のはぢかあるべき。しかあれど、云はゞ止みなんも又父の仰せにそぶく。悪しき石ながらも打たねば火を生ぜず、破れたる鐘もたゝけばひゞくは、天地自ぜんのことはり也。いなや返じなきに無下に國出せんも亡父の心にそぶくかと、しめ野分くるを談じあひけるに、父の遺言守るとなれば、母家の人のさしづに任せて其日はやみぬ。

父ありてあけぼの見たし青田原。

父のみとり日記は彼れの三十九才のときに認めた涙の物語である。六十九才にして

この世を棄た父の悲しき最後を見守る一茶の偽らざる愛の告白であつた。綿々として盡きることなき愛の流れが彼れより父へなみくと注がれてゐる。父を失つてから一入淋しくなつた彼れは又して放浪の旅に出る。父に捧げた愛は其の流れを止められてしまつた。出場を失つた愛はいつくを辿らうとするのであらうか。

陽炎や子をなくしたる鳥の顔。

咲花やけふをかぎりの江戸住居。

我春も上々吉ぞ梅の花。

蓬萊になんむなんむといふ子かな。

幼子や握々したる梅の花。

斯う活て居るも不思議ぞ花の蔭。

古郷や母の砧のよわり様。

けさの春四十九ぢやもの是も花。

子ありてや橋の乞食もよぶ螢。

おのれやれ今や五十の花の春。

春立や先づ人間の五十年。

みどり子や御箸いたゞくけさの春。

御地藏や花なでしこの真中に。

露の世や露のなでしこ小なでしこ。

石となりし姫がなでしこありしよな。

稻妻をとらまへたがる子ども哉。

妻やなきしはがれ聲のきりくす。

寝よ子供やける山から鬼が来る。

あこが餅あこが餅迎並べけり。

この放浪がはじまつてから十三年、きく女を妻としてはじめて家庭を持つまでは、彼れの愛は微かながら家庭に其の目標を置いてゐた。父の遺言が思ふやうに行はれないことを悲憤して故郷を去つてみたものゝ、やはり何かは知らず自分の心に淋しい充たされぬものがあつた。

放浪のうちに新年を迎へて上々吉ぞとは云つてゐるものゝ次第に寄る年波を顧みなければならなくなつて來た。西行のやうに家庭を去つたものは、この年輩にもなれば

心は漸く澄んでゆくべき時であつた。

一茶の心は漂泊より家へと進んでゆく。遺産分配の督促に故郷に歸つて來る。つひには居催促によつて其れを解決せなければならん程彼れは妻に飢ゑ、子に慕はしさを感じてゐたのであつた。家庭愛へとまつしぐらに進んでゆくのであつた。

土地が分たれ家が定められてみると、一茶は一度に心の曇りを拭ふことが出来るやうになつた。眺める故郷の風物は同じものであることには變りはなかつたが、新しい親しみが彼れに感ぜられるやうになつた。いそ／＼として家の圍りを歩いたり、自分の青田を見巡つたり、家のたゞすまゐをしげ／＼と眺めるのであつた。彼れには最早與へられないかも知れんと觀念されたものが彼れのものとなつた。飄々として物に捉はれなかつた彼れも不思議な愛をこの物に感ずるやうになつてゆく。

渡鳥が其の巢に還つたやうに、五十年の流浪の子に家が興へられた。其の日の身過ぎは別に心配はいらなくなつた。彼れの愛の目標であつた家庭が、妻子が、漠然たるものから次第に凝固して今や目の前に近づいて來た。

自分の家に住まつてみると先づ彼れの次の要求は妻であつた。空に描いた妻を現實に持つて來ることであつた。きく女がしかも花恥かしい二十七歳の子のやうなきく女が彼れに興へられたとき、彼れはいかに人生の幸福を思つたであらう。

嫁星の行儀笑ふやけふの雨。

寝むしろや煙草吹きかける女郎花。

我が菊やなりににもふりにも構はずに。

家のなかに唯二人の他愛ない姿がカリカチュアのやうに映つて來る。彼れはもう江戸には執着がなくなつた。早速江戸に出かけて久しい友垣に訣別をつけてゐる。この年ほど彼れの幸福な年はもうあり得ないであらう。

御雛をしゃぶりたがりて這ふ子哉。

金時がてんつるてんの裕かな。

月さえよあの世の親が今ござる。

おらが世やそこらの草も餅になる。

初給しなのへ嫁がござるげな。

瓜の馬くれろくと泣く子哉。

この頃の彼れの心の眼には親への愛もしみ／＼と回想せられると共に、子供の愛がつねに彼れの望みとして望まれてゐた。妻の愛は得られてゐる。次に彼の求めるものは父性愛でなければならぬ。

文化十三年四月長男混藏が誕生した。一茶の願ひは充たされた。けれど彼れは母の死父の死はやがて自分より早く逝くものとの思ひはあつたが、まさか子が死するものとは夢にも考へてゐなかつた。人の子の死は知つてゐる。けれども我子は死なぬものと思ふて、その行末を想像してみるのが親の癖である。それが裏切られてしまつた。翌月には子の死顔を見なければならなかつた。

翌十四年に二男千太郎が呱呱の聲を擧げる。

はつ拾にくまれ盛りに早くなれ。

の望みは又打消されてしまふ。しかしまだ生れて間のない赤子の死である處に猶彼れの慰む處があつた。

其翌年文政元年の五月には初めて女兒が出生した。すく／＼と育つてゆく姿を見ても彼れははじめて安心した。敏かれと云ふ意味でさとと名づけた。この女兒には彼れの愛が傾倒されてゐた。おらが春に、

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにして、ものにさとかれ辻名をさとよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうち／＼あは／＼天窓てん／＼、かぶり／＼ふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづがれば、とみにとらせけるを、やがてむしや／＼しやぶつて捨て露程の執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗

を打破りつゝ、それもたゞちに倦て障子のうす紙をめりくむしるに、よくした
く〜とほむれば、誠と思ひ、きやら〜と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心の
うち一點の塵もなく、名月のきら〜しく清く見ゆれば、跡なき俳優見るやうに
なか〜心の皺を伸ばしぬ。又人の來りてわん〜はこどにといへば犬に指し、
かあ〜はと問へば鳥にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛嬌こぼれてあいらし
く、いは〜春の初草に胡蝶の戯る〜よりもやさしくなん覺へ侍る。此おさな、佛の
守りし給ひけん、迨夜の夕暮に持佛堂に蠟燭てらして鑰打ならせば、どこに居て
もいそがはしく這よりて、さわらびのちいさき手を合せて、なんむなんむと唱ふ
聲、しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝也。それにつけてもおのれ、かしら
にはいくらの霜をいたゞき、頭にはしは〜波の寄せ來る齡にて、彌陀たのむす

べもしらでうか〜月日を費すこそ、二つ子の手前もはづかしけれと思ふも、其
の座を退けばはや地獄の種を蒔いて、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそ
しりつゝ、剩へ佛のいましめし酒を呑む。折から門に月さしていと涼しく、外
にわらはべの踊の聲のすれば、たゞちに小椀投捨て片いざりにいざり、出て聲を
上げ手眞似して、うれしげなるを見るにつけつゝ、いつしかかれをもふり分髪
たけになして、おどらせて見たらんには、廿五菩薩の管絃よりもはるかまさりて
興あるわざならんと、我身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。かく日
すがらをじかの角のつかの間も手足をうごかさすといふ事なくて、遊びつかれる
物から朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯焚きそこら掃か
たづけて團扇ひら〜汗をさまして、閨に泣聲のするを目の覺める相圖とさだめ、

手かしく抱き起してうちの畠に尿やりて、乳房あてがえば、すはく吸ひながら板のあたりを打たきて、にこく笑ひ顔を作るに、母は却々胎内のくるしびも日にく襦袢の穢らしきもほとく忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、なでさすりて一入よろこぶありさまなりけらし。

蚤の跡かぞへながらに添乳哉。

よりく思ひ寄せたる小兒をも遊び連にもと爰に集めぬ。

柳からもくぐあくと出る子哉。

蓬萊になんむくといふ子哉。

年間へば片手出す子や更衣。

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初衿。

名月を取てくれろとなく子哉。

子寶がきやらく笑ふ榎火哉。

あこが餅くとて並べけり。

妹が子の脊負ふた形りや配り餅。

餅花の木陰にてうちあはれ哉。

涼風の吹く木へ縛る我子哉。

わんぱくや縛られながらよぶ螢。

五十を過ぎて初めての子の愛に接する一茶は、子供の世界はすべてが未知の世界であつた。其の故にそれ等のすべては珍らしく愛らしかつた。邪氣のない、あるがまゝ

の子の生活は一生を僻んで来た彼れにははじめて見ることを許された無心の世界であつた。

子供については彼れは結婚以前から次第に其の意を感じてゐたのであつたが、今我子の無心な姿に接して、ひどく陶醉せずにはゐられなかつた。子なき時の句作を今こゝに集めて子の行末をさへ祝つてゐるのである。

七

しかるにこのさと女もこの年に死んでしまふ。

樂しみ極まりて愁ひ起るはうき世のならひなれど、いまだたのしびも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑子を、寢耳に水のおし來るごとき、

あらくしき痘の神に見込まれつゝ、今水腫のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく、側で見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日経たれば痘はかせぐちにて雪解の峽土のほろ／＼落るやうに瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやしてさん儀法師といふを作りて、笹湯浴びせる眞似かたして神は送り出したれど、益々よはりてきのふよりけふは頼みすくなく、終に六月廿一日の葬の花と共に此世をしほみぬ。母は死貌にすがりて、よ／＼と泣くもむべなるかな。この期に及んでは行水のふたゝび歸らず、散花の梢にもどらぬくひとなどとおきらめ貌しても、思ひ切がたきは恩愛のきづな也けり。

露の世は露の世ながらさりながら。

と、其の愛娘を死の手に奪はれたことを悲しまなければならなかつた。

秋風やむしりたがりし赤い花。

名月や膳に這寄る子があらば。

頬べたにあてなどするや赤い柿。

いかに忘れやうとしても忘れ得ないのは如何にも恩愛の絆であつた。

文政三年には三男の石太郎が生れて來た。十月に生れて翌年の一月にははや他界し

てゐるのである。

もう一度せめて目を明け雑煮膳。

鏡餅祝ひし甲斐もなく烏。

なでしこはなぜ折れたぞよく。

陽炎や目につきまるとふ笑ひ顔。

石太郎此世にあらば盆踊。

こんなことを云つては老の繰言を繰かへすより他に仕方がなかつた。それでも翌五年には又して四男金三郎が生れてゐる。けれどこゝに彼れの心を暗くしたのは其の翌年の六月にきく女の死を見たことであつた。次々に世を早くする子達を悲しむことは其の悲しみをきく女と別ち得たのであつたが、彼女の他界は一茶には取返しつかぬ損失であつた。

小言いふ相手もあらばけふの月。

小言を云はれつゝも其の小言が懐かしかつた。

盆が來る。亡き妻の新盆が來る。金三郎は残つてゐる。

かたみ子や母が來るとて手をたゞく。

○をさな子や笑ふにつけて秋の暮。

○團扇の柄なめるも乳の代りかな。

孤兒を抱いて自分も共に泣かねばならぬ一茶は悲しかつた。年若い妻に死別し、六十になつた自分が二つの子と暮されねばならぬことは、洵に人生の悲惨事ではなくてはならぬ。

金三郎は里子にやつた。到底彼れには世話が出来なかつた。其の金三郎も亦死んで行つた。一茶はもとの一人となつた。残されたものは悲しき愛の追憶と寄る年波とであつた。

結婚してから、きく女の死までの約十年は彼れの苦行の時代であつた。彼れ一人が何うしてでも暮せばよかつた漂浪の時代に比べると、この苦行は更に辛いものであつ

た。愛にもつれて愛に泣く人生の悲喜の忙しさよ。

妻なしやありやかすんで居る小家。

あこよ來よ轉ぶも上手夕涼。

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは。

用捨なく水祝ひけり五十聲。

逃しなや水祝はるゝ五十聲。

小坊主よも一つ笑へ梅の花。

目出度さもちう位なりおらが春。

花の陰あかの他人はなかりけり。

竹の子の千代もほつきり折れにけり。

筒よ人の子ならば花咲かん。
 露の玉つまんで見たるわらは哉。
 子供らを心でをがむ夜寒かな。
 古郷の留守居も一人月見哉。
 ことしから丸まうけ也娑婆の空。
 しんくとすまし雑煮や二人住。
 餅搗きやせがむ子供をはり合に。
 若竹の子さへのがれぬうき世哉。
 のゝさまと指た月出たりけり。
 栗拾ひねんくころり云ひながら。

夕霞ねんくころりく哉。
 もとくの一人前ぞ雑煮膳。
 寝せつけし子のせんたくや夏の月。
 末の子や御墓参りの箒持。

八

彼れが眩しい心をもつて望みかねてゐた家庭は決して輝かしい樂園ではなかつた。
 人々のする家庭生活は人目には美しく慕はしいものであつても、それは人生の樂園と
 のみはゆかないものであつた。
 其處には何かの苦しみがあつた。彼れが味はつた現實の家庭生活は彼れの思ひも設

けぬものであつた。彼れの老の身には背負切れぬ重荷となつて、つひには描かれた繪のやうにあつけなく壞えていつた。

其處に残されたものは惻々として身に迫る逝きし妻子の追憶の涙であつた。そして今迄の淋しかつた漂泊の時でさへ味はなかつた深い寂寥と老の覺束なさが、しみじみと身につまされて來るのであつた。

氣難かしい一茶は一層難かしい人間とならざるを得なかつた。寧ろ自棄の心さへむくく〜と頭を擡げて來るやうになつた。この淋しさ腹立たしさを紛らすためには、やはり彼れには妻を求めることより他に仕方がなかつた。

恰度さく女の死の一年後、文政七年五月、三十八歳の雪女を迎へることになつた。この妻とはしつくりいかなかつたらしく僅か三月にして離縁してゐる。彼れは多分こ

の妻には愛を感じ得なかつたらしい。

瓜糸蔓切つてしまへばもとの水。

とあつさり彼女を思ひ切つてゐるのである。初婚の妻であり、五人までも子をなしたきく女を忘れ得ない一茶には、雪女との離婚はそんなに辛いものではなかつた。(かうなつては却つて獨身の生活が懐しくなつて來る位であつた。

大根を丸ごとかぢる爺かな。

と自嘲し、

庵の夜は寒くわるゝほどの柱。

と、起きてみつ寝てみつの淋しさを啣つてもゐる。

最後の妻やを女が一茶のもとにかしづくやうになつたのは又其翌年、文政八年で、

彼れは六十三歳を數へてゐた。四十六歳の花嫁とこの老翁との生活は寧ろ悲惨な感じさへする。けれど老つくした彼れには、どうしても面倒を見る人がなければならんし出來ればこの家をつたへる子が欲しかった。

彼れの身も心も、其れを燃えたゝす愛は冷却してゆくのみで、病後次第に不自由になつてゆく體軀と心の弱りをつくづく顧みなければならんやうになつてゆく。彼れはいかに愛のさみしさ、悲しさを憶ふたであらうか。人を對象とする愛が如何に覺束ないものであるかを悟らざるを得なかつた。

彼れの願ひはやを女の腹に宿し得たけれど、其の子の顔も見ずに世を去つてゆく彼れの姿は、洵に悲しき愛の行者の終末と云ふことが出来るであらふ。

佛に病める一茶

一

廿八日。晴。祖師の忌日なり。朝とく嗽ぎなどし給ふに、熱のさはりにもやならんと止むれども、一向にとゞまり給はず。御佛にむかひ常のごとく看經なし給ふに御聲低う聞ゆるいかうおとろへたまふ後姿、心細くおばゆ。

六日。……つれなき親とも思ひつらめ。皆是すぐせの因縁とあきらめよや。今年は我も二十四輩に身をなして、かの地にて一度汝に巡りあひ……。此度は往生とげたりとも何の悔ひかあらんと、はら／＼と涙を落し給ふ……。

十五日。……抑も床つき給ふ日より、朝夕の看經怠る時なくつとめ給ふに、今はおきふしもまゝならず。床にありながら、ともしび影ほのかに、稱名の聲となへたまふ聲の常に變りて聞ゆるこそ、何となく心ぼそけれ……。

十九日。……父うるはしく目をあき給ひ、いいなん、連れて歩め、と云はるゝ。いづくへばし行給ふらんと問ひければ、いふにやをよぶ、至心信樂欲生我國と病なき時の聲のごとくたからゝとなへたまふ。……。

一茶の父のみとり日記には、父の信仰についてかくのごとき記事がある。父の小林彌五兵衛は家代々の淨土眞宗の篤い信仰を持つてゐたことは、充分にこれによつても覗はれる。勿論父が若い時からこの篤信をもつてゐたかは知らないが、彼れの不運な生活が彼れをして益々他力本願の信を篤からしめたことは云ふ迄もないであらう。

生れつき温順な父は、妻の死、後妻による家庭の風波、虐めらるゝ子の悲しさ、愛子の放浪、氣儘な妻の仕打等、すべてが彼れの人生苦でないものはない。しかもそれを何うすることも出来ない彼れは、小さい時から聴聞した眞宗の教によつて人間の業を考へ、業因の強さをしみくゝと身に徹して覺えたのであつた。たゞたのむべきは彌陀他力の本願のみである。本願力に絶することによつてのみ自分は救はれ得ると深く信ぜざるを得なかつたのである。

幾年たつても膝下に歸らぬ長男、いつ果つとも知らぬ妻の邪慳。そうしたものゝ中にあつて唯ひとり運命を畏れてゐた彼であつてこそ、はじめて七十近い年まで忍び得たのであつた。

重い病の床についても、祖師親鸞の忌日を忘れず、頭の擧がらぬ寢床にて稱名を怠

らなかつた。この敬虔な佛の使徒によつて、どれだけあの暗い小林の家が明るくされ
たか知れなかつた。

一茶はこの父によつて小さい時から佛の愛を聞かされてゐたであらう。しかし邪慳
な繼母によつて苛まれ、生母の愛が拒まれてみれば、幼い彼れは佛によつて其の運命
を明め、佛の愛の大胸に入るには、餘りに若いし、寧ろ人と世に咒ひを送るか自分を
僻むよりほかに仕方がなかつた。

この佛に最も遠い方向を探ざるを得なかつたことは、彼れに於ては止むを得なかつ
たのである。其のために彼れは江戸に出てからは久しい放浪の生活に浮身をやつして
ゐたのであつた。と云つて佛にまで咒ひを送つたのではなかつた。

寛政三年春江戸を立つて、二六庵の門を去り清々しい氣持で獨自の世界を拓く希望

に燃えながら、五月中旬には絶えて久しい故郷にかへり、懐かしい父の膝下に投じて
ゐる。

其翌年早々三十歳にして俳諧寺一茶坊と名告を擧げてゐる。俳諧寺と云ひ一茶坊と
云ふ。俳道に出家して俳三昧の生活に入ることを示してゐる。そして父の代參として
京の本願寺に詣するのを手初めとして四年に亘る長い旅に立つたのであつた。

西行が旅にあつて歌を詠むことが、彼れの修行であつたやうに、一茶もやはり旅に
あつて多くの俳人に接して俳の道を修め俳魂を養ふことは彼れの修行であつた。

俳諧によつて磨かれてゆく彼れの魂は、彼れの僻みの根性まで淨めてゆくのであ
るが、彼れは何かしら常に淋しい物足りないものを彼れの胸に感じてゐるのであつ
た。其れは彼れの素直な根性を僻めてしまつた愛の缺乏であつた。彼れはこの堰かれ

た愛を取戻すために淋しく惱ましい日を送つてゐたのであつた。

彼れの僻みは愛の熱望の反面であつた。俳の眼を啓くことによつて、これを充たさうとする。しかしその努力は寧ろ益々彼れを淋しい方向に漂泊せしめるのであつた。

芭蕉の心は却つて彼れを寂寥の一路につき立たせるものであつた。彼れは芭蕉の力によつて俳道が世に榮え、又そのことによつて自分のやうな無藝の乞食が世に住み得ることの有難さを感じながら、寧ろ彼れは芭蕉と違つた、却つて相反する方向へと進みつゝあつた。

心を俳のさびしをりに澄ますのではなかつた。さびしをりの中から還相廻向するのであつた。俳の心を生活の坩堝によつて溶かすのであつた。

彼れの僻みの俳諧、彼れの生活點描の俳諧は、ありのまゝの彼れの心を其儘に再現

する處に生れて來る。彼れは凡夫を歌ふ俳人であることを寧ろ満足してゐるのであつた。

二

享和元年、はからずも父の病床に侍して、十餘日の看病をして、しかも父の敢なき死に接して彼れは其の悲しみの心をみとり日記に記してゐる。

……あはれ空しき屍にとりつき、夢ならばはやさめよかし。夢にせよ、うつゝにもせよ、闇に灯をうしなへる心地して、世にたのみなきあけぼの也けり。無情の春の花は風にさそはれてちり、有界の秋の月は雲にともなつて隠るゝ、況んや生者必滅會者定離の世のならひ、誰しも一度は行道なれど、父の生命のきのふけ

ふとはしらざりけるもおろか也。……。

今は野おくりの時とはなりぬ。……棺は草のたかみに据ゑて香をひねる手の力さへ夢幻のやうにおぼへける。導師のグハンキンドクと共に棺は煙と成りにけり。有爲轉變のありさま也。

……キドアイ樂はあざなへる繩のごとく、あへば別るゝ世中今更おどろくべき事にはあらねど……。

行水ふたゝびかへらず、石の火にかへらず、八千度いかにくゆともかひなき事にしあれど、たのみとおもふゆかりも皆かれ果て、しらぬ國へひとり放たれしごとく、便なき孤の一茶が心内、思ひはかられて哀なりき。

父の死によつて、彼れの心には無常の淋しさがしみぐとこみ上げてくるのであつ

た。有爲轉變の人と世の中がつくぐ悲しまれるやうになつた。

この悲しみはやがて三十九歳の彼れに佛心を求めしめねばならなかつた。強い運命觀がいつかは其の運命の救主にまで近づかしめねばおかなかつた。

彼れは又放浪の生活をはじめ。つれない故郷の人々に追はれて彼れは江戸へかへつて來た。

御佛の外の石さへ秋の暮。

おく露やことしの盆は上總山。

一桶は如來のためよ朝若菜。

春がすみ鍬しらぬ身のもつたいな。

欲捨よくと吹か秋の風。

白露しらつゆに氣きの付年つくとしと成なりにけり。

露つゆの玉たま一ひとツつに故郷こきやうあり。

草くさの露つゆあはれことしも踏ふみそむる。

露時雨つゆしぐれ佛頂面ぶつぢやうめんへかゝりけり。

島々しまぐも佛法ぶつぽふありて燕つば哉。

御佛みぼつもこち向玉むきたまふ櫻ざくら哉。

夕暮ゆふぐれや霞かすむ中なかより無常鐘むじやうかね。

我梅わづめやとにかく薄うすき衆生しゆじやう縁えん。

上人じやうじんは菩薩ぼさつと見たる櫻ざくら哉。

花はなさけや佛法ぶつぽふわたる蝦夷えぞが島しま。

花はなさくや欲ほのうき世よの片隅かたすみに。

花はなちるや權現ごんげん様の御膝元おひざもと。

散ちりがての花はなよりもうき泪なみだ哉。

ちる花はなや已すにおのれも下り坂くださか。

花はなちるや稱名しやうみやうなる寺てらの犬いぬ。

涼風すずかぜはあなた任せまかぞ墓はかの松まつ。

御迎おむかへの鐘かねを聞ききくやく蚊かみ哉。

涼風すずかぜも佛任ぼつにんせの我身わがみかな。

身みのうへの鐘かねとしりつゝ夕ゆふすゞみ。

御佛みぼつや蝦夷えぞが島しまへも御誕生ごたんじやう。

おく露のはり合もなき念佛哉。

衆生ありさて鰯あり月は出給ふ。

なむあみだおれがほまちの菜も咲た。

白露のてれん偽なき世哉。

露はらりく大事のうき世哉。

西山やおのれがのるはどのかすみ。

長いぞよ夜が長いぞよなむあみだ。

救世観世音かゝる夜寒を助給へ。

露ちるやむさい此世に用なしと。

年もはや穴かしこなり如來様。

とる年もあなた任せぞ雪佛。

うそ寒や如意輪さまもつくねんと。

うそ寒や只居る罰が今あたり。

露ちるに彌陀の御苦勞あそばさる。

世の中へおちて見せけり草の露。

なむ大師しらぬも粥にありつきぬ。

浮け海鼠佛法流布の世なるぞよ。

文化十一年に来るまでに彼れの心はこんなに佛臭くなつて来る。十一年は恰度きく女と初婚の夢まどかな年であつた。家庭への望みはとげられた。けれどこれが却つて彼れの苦惱の更により深きに趣く契機となつた。次々に生れては死んで行く子の死顔

徳本の念佛ともなれ石の露。
 露の世は得心ながらさりながら。
 丸い露いびつな露よいそがしき。
 息災で御目にかゝるぞ草の露。
 初旭鉞も拜まれ給ひけり。
 花ちるやとある木蔭も開帳佛。
 花ちるや日の入かたが往生寺。
 花の世は地藏ぼさつも親子哉。
 寝て涼む月や未来がおそろしき。

に彼れの心はいよ／＼暗くなつてゆく。
 暗くなるにつけてはしみ／＼と佛が偲ばれるのであつた。
 しん／＼としらん松の春の雨。
 花ちるな彌陀が御苦勞遊ばさる。
 翌しらぬ盟の魚や夕涼み。
 涼しやな彌陀成佛の此かたは。
 十念をうけるこぶしへ鳴く蚊哉。
 花咲て本んのうき世と成にけり。
 目出度はことしの蚊にも喰れけり。
 はづかしやおれが心と秋の空。

文政に入ると、其前半は子達の死に次ぐ死の悲愁がつゞいて、最後に最愛の妻と女
 の逝去にいたる悲痛な時代であり、後半は第二の妻第三の妻と妻をかへ、ついに文
 政十年の彼れの死に終結する。

行春やどれが先立つ草の露。

ぼた餅や藪の佛も春の風。

陽炎の中にうごめく衆生哉。

御佛や寝ておはしても花と錢。

寝ておはしても佛ぞよ花が降る。

小うるさい花が咲くとて寢釋迦哉。

今の世も鳥は法華經鳴きにけり。

苦の娑婆や櫻が咲けばさいたとて。

山の月花盗人をてらし給ふ。

南無あみだ佛の方より暑さかな。

南無あみだどてらの綿よひまやるぞ。

南無あみだ佛の方より鳴く蚊かな。

蓮の葉に此の世の露は曲りけり。

蓮の花少し曲るも浮世かな。

人数は月より先へ缺けにけり。

虫の屁を指さして笑ひ佛かな。

鶯や彌陀の浄土の東門。

善の綱しつかり蝶のすがりけり。

善の綱悪のさくらの咲きにけり。

御佛にかぢり付いたる藪蚊かな。

秋の夜や祖師もかやうに石枕。

人に風花は申すに及ばぬぞ。

南無大師昔も花の降りしよな。

身代りに時雨ておはす佛かな。

ぼつくりと死ぬが上手な佛哉。

御ねはんやとりわけ花の十五日。

梅さくや手垢に光るなで佛。

我もけさ御僧の部なり梅の花。

花咲くや道の曲りに立地藏。

只たのめ花もはらくあを通り。

地獄へは斯う参れとやかんこ鳥。

ねがはくば念佛を鳴け夏の蟬。

無常鐘蠅虫めらもよつくぎけ。

蠅一つ打てばなむあみだ佛哉。

秋來ぬとしらぬ狗が佛かな。

秋日和とも思はない凡夫哉

先へ行て下冷ぬ場を必ずよ。

西方と氣づく空より秋の風。

秋風やちいさい聲のあなかしこ。

露はらりく大事のうき世哉。

露ちるや地獄の種をけふも蒔く。

御佛はきびしき盆とおぼすらん。

送り火や今に我等もあの通り。

みだ佛のみやげに年を拾ふ哉。

御持佛や肩衣かけて煤をはく。

もろくの愚者も月さす十夜哉。

彼のこれ等の句を辿つて見ると、其處に彼れの向つて行く方向が見えるやうな氣がする。愛するものから次々に叛かれてゆく一茶は、まゝならぬ人生を凝視するより他に仕方がなかつた。そして彼れは其俳道に於いてとつた凡夫の道を佛の世界に於ても見出してゐるのである。

凡夫のゆくべき道は本願他力の道であつた。何ごともあなたまかせにする心易い道が凡夫に徹するところに現はれて来る。妻も子も自分も何も彼も一つとして自分の力によつて支配し得ない。集散離合常なき人生に何一つ頼みになるものはない。

たゞあるがまゝに業の趣くにまかせてゆくとともに何とも云へぬ心の息ひを得ることが出るのであつた。人の愛は空しい、しかしこの業報のまに／＼漂ひゆくことに徹

するところに、あり〜と感ぜられる佛の愛はまことに永遠に渝りなきものであつた。他力信心〜と一向に他力にちからを入れて頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛られて、自力地獄の炎の中へぼたんとおち入候。其次にかゝるきたなき土凡夫をうつくしき黄金の膚になしくだされと、阿彌陀佛におし誂へに誂ばなしにしておいて、はや五體は佛染み成りたるやうに悪すましなるも自力の聽本人たるべく候。問ていはく、いか様に心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答へていはく、別に小むづかしき子細は不存候。たゞ自力他力、何のかのいふ芥もくたをさらりと、ちくらが沖に流してさて後生の一大事は、其身を如來の御前に投出して地獄なりしも、極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第、あそばされくださりませと御頼み申すばかり也。如斯決定しての上には、なむ阿みだ佛といふ口

の下より、欲の網をはるの野に手長蜘蛛の行ひして人の目を霞め、世渡る雁のかりそめにも我田へ水を引く盗み心をゆめ〜持つべからず。しかる時はあながち作り聲して念佛申に不及、ねがはずとも佛は守り給ふべし。是則當流の安心とは申也。穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしの暮。

と彼れは彼れの傑作おらが春の最後に書いてゐる。こゝに彼れの心の落付があつたことを示して充分であつた。

四

彼れがきく女を得て家庭に憧憬れ、さしも執著の深かつた江戸の俳壇を引退すると

き、彼れの莫逆の友であつた夏目成美は、其の歸去來を記念するために、他の俳友と
 錢別の俳會を催した時の名残として彼れが編した三韓人の序に、成美は云つてゐる。

木のかくれ、岩のはさまにも、ひさしくとどまらざるは法師の境界なり。しなの
 國にひとりの隠士あり。はやくよりその心ざしありて、森羅萬象を一椀の茶に
 放下し、みづから一茶と名のりて、吾ひのものとの中をことごとくめぐりて、風
 露宿さらに一方に足をとどめず。さるをこの江戸に來りては風土のよろしきにや
 めでけむ。また友がきのおもしろさにやほだされけむ。こゝに住ること、年を
 こえ年をかさねてやゝ十年にもあまりぬべし。さるからいよ／＼まじはるものお
 ほくなりまさりて、今は本土をわするゝに似たり。此ほどすみだ川に逍遙せる
 わたし舟のおそきをまつとて、心なく我かけのうつれるをみるに、汀の浪は額に

よせ、雪とぶ尾花は頭につもれるに、今はじめておどろくにはあらねど、かゝる
 かたちになりて、いつまで名利の地にあるべきぞ。蟬の小川はわたらじとちかひ
 し人もあるをと、はじめのこゝろさしにたがひたるをしきりにくひはぢて、たち
 まち草庵を打やぶり、古さとにひきこもらむとす。舊知、心友のなごりをしみて
 杖をひかへ杖をとどむれどもさらに聞ゝいれず、今はさらばとて……。

かく執着の深かつた江戸の俳壇を去ることは彼れにも辛かつた。けれど其志しを
 ひるがへして奥信濃の故郷へ歸つたことは、一人の凡夫に生きた一人の俳人であるこ
 とを、更に其の生活の上に實證しやうとするがためであつた。

きく女との新婚は晩婚ではあつたけれど、彼れのぞみは充たさるゝに充分であつ
 た。久しき流浪から家庭の安住を得た時には彼れは子供のやうな生な心をもつて、五

十二歳にしてはじめて味ひ得る夫婦生活に人間の生甲斐を感じたのであつた。

しかしこの道は彼れの想像もしなかつた難行道であつた。美しい花はもつがとげくしい荆棘の道であつた。其うちに唯一つの燈火であり色も香も美しいきく女までも奪はるゝに至つては、花なき茨の道は更に嶮しいものにならざるを得なかつた。

この嶮しい道を歩むためには彼れは餘りに老ぼれてゐた。彼れは彼れに與へられた運命の苛酷を泣きながらも、其の運命に隨順することより他に採るべき道のないことを悟つてゐた。他力に頼るやさしい心が、眞實に彼れをして凡夫の域に眼ざめしめたと云ふことが出来るであらう。

ともかくもあなたまかせの年の暮。

こゝまで来れば凡人一茶は、彼れの生涯の願ひをすべて充たし得たことになつたの

である。

五

文政六年六月一日。突如襲ふた大火によつて彼れの家も類焼の厄にあつた。彼れはこの時其の火を見ながら、

螢火もあませばいやはやこれははや

と即興の一句をなしてゐる。小さい火でも不始末すれば大それたことになつて來ると云ふのであらう。落付いてはゐるものゝ其の大した驚きが見えてゐる。

焼残つた土藏がとり敢ず彼れの住居となつた。夏の暑いのに土藏住居とは彼れの不快も察せられる。この中で居て懐妊した第三の妻やを女と避難者のやうな生活をしな

がら、新しい家の再築を企てて居たのであつたが、ふと中風症が再發してしまつた。保養をしながらもすきな俳諧は忘れられず、不自由な身をあちこちに運んで俳友を訪ね歩いて居た。しかし冬の十一月が雪と共に奥信濃を淋しく塗りつぶした十九日、命運極まりて申の刻稱名の一瞥と共にこの偉大なる凡夫は人生の苦杯をすて、安養の淨土に還つていつた。

一了一

昭和十一年十月十八日印刷
昭和十一年十月廿三日發行

西行と一茶・定價壹圓五拾錢

著者 蓮沼文範

發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷所 森島印刷所
東京市芝區西應寺町六一番地

圖版 旭寫眞製版所
東京市京橋區橫町二丁目

製本所 兩角製本所
東京市芝區新橋五ノ一四番地

東京市芝區芝公園七號地十番

發行所 大東出版社

振替東京一九四七一番
電話芝(43)三九四四番

佛教社會學院編
新興類似宗教 判批

佛教家醫學者權威十數名の執筆になり、正邪の區別を一般に認識せしめる好々噴々のもの。教育家宗教家の好伴侶。

四六判三百卅頁
定價 壹圓
送料 十錢

高島米峰序 島影 廣木勇朗 盟著
現代人の類似宗教の真相
觀たる

天理、ひとのみち、生長の家等の内幕を白日に曝して其のカラクリを一々別抉し、其の欺瞞を指摘した快書。その害毒の多きを知れ。

四六判三百四十頁
定價 壹圓
送料 十錢

中村古峽著
迷信に陥るまで
|| 擬似宗教の心理學的批判 ||

精神醫學會の泰斗の著書が迷信の一切を解剖し、迷信に陥ちゆく心理を説き、擬似宗教は詐欺の心理と同一なりと教へた警告書

四六判三百廿頁
定價 壹圓
送料 十錢

島影 盟著
墓相と心靈問題 判批

無批判の裡に瀾漫して行く墓相學の愚を嗤ひ、併せて心靈問題に科學的メスをいれ、彼等一流の巧言から世人を救はんとするもの

四六判百八十頁
定價 六十錢
送料 六錢

各宗權威名家執筆
佛教より **正信迷信の別區**

推尾辨匡(佛教教理)、加藤精神(眞言)、二宮守人(天台)、大野法道(淨土)、江部鴨村(眞宗)、山田靈林(禪)、馬田行啓(日蓮)、本莊可宗(社會學)の諸氏が夫々の立場を代表して其の區別を教へた指導書

四六判三百廿頁
定價 壹圓參拾錢
送料 十錢

邪教に迷はされた人々
|| 被害實話 ||

宗教的教養なき爲め邪教に迷はされ、人命を失ひ、財を壞り、暴行を受け、一家没落する等の悲惨事多し、今その實話を集めて良民の戒となしたるもの。外に「邪教彈壓史」、「邪教取締の法規と現狀」の二篇を收む。

四六判三百六十頁
定價 壹圓
送料 十錢

倉田百三著 **最新刊**

四六判四百五十頁挿繪廿數葉入美本
一圓五十錢・送料十二錢

信仰讀本
親鸞聖人

著者曰く：親鸞の信仰の眞髓をよく浮彫りに現すため、生涯を一の物語として編んだ。讀易い美しく深き内容と、ゆたかな文飾をもつて聖人の性格と信仰との精髓をとらへた事とと信ずる。

まことの信を求め悦ぶ人へ 「出家とその弟子」に示された深刻な内觀を筆を以て新に書き下された傑作。國寶御傳鈔中の廿數畫をその文に對應せしめて錦上更に花を添ふ。即時愛讀をすむ。

曉島 敏著 六〇・送六
親鸞聖人の信念と神らが道

梅原眞隆著 六〇・送六
淨土教の實踐法

翁 久允著 一五〇・送一二
印度佛跡を觀る

倉田百三著 六〇・送六
生活と一枚の宗教

大谷瑩潤著 二二〇・送一〇
正信偈講話

岡本かの子著 一三〇・送一四
佛教讀本

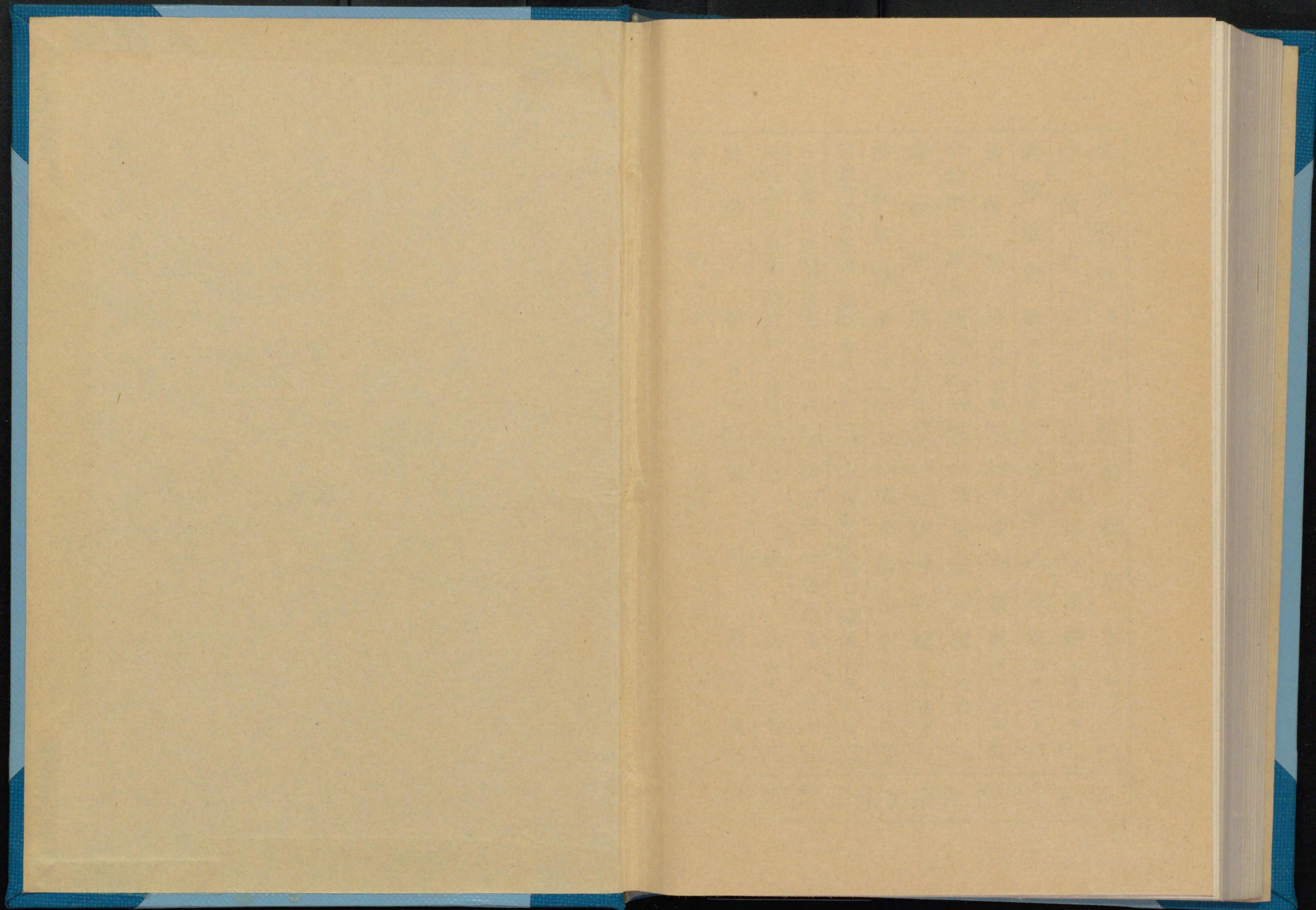
本莊可宗著 六〇・送六
念佛生活の論理的據根

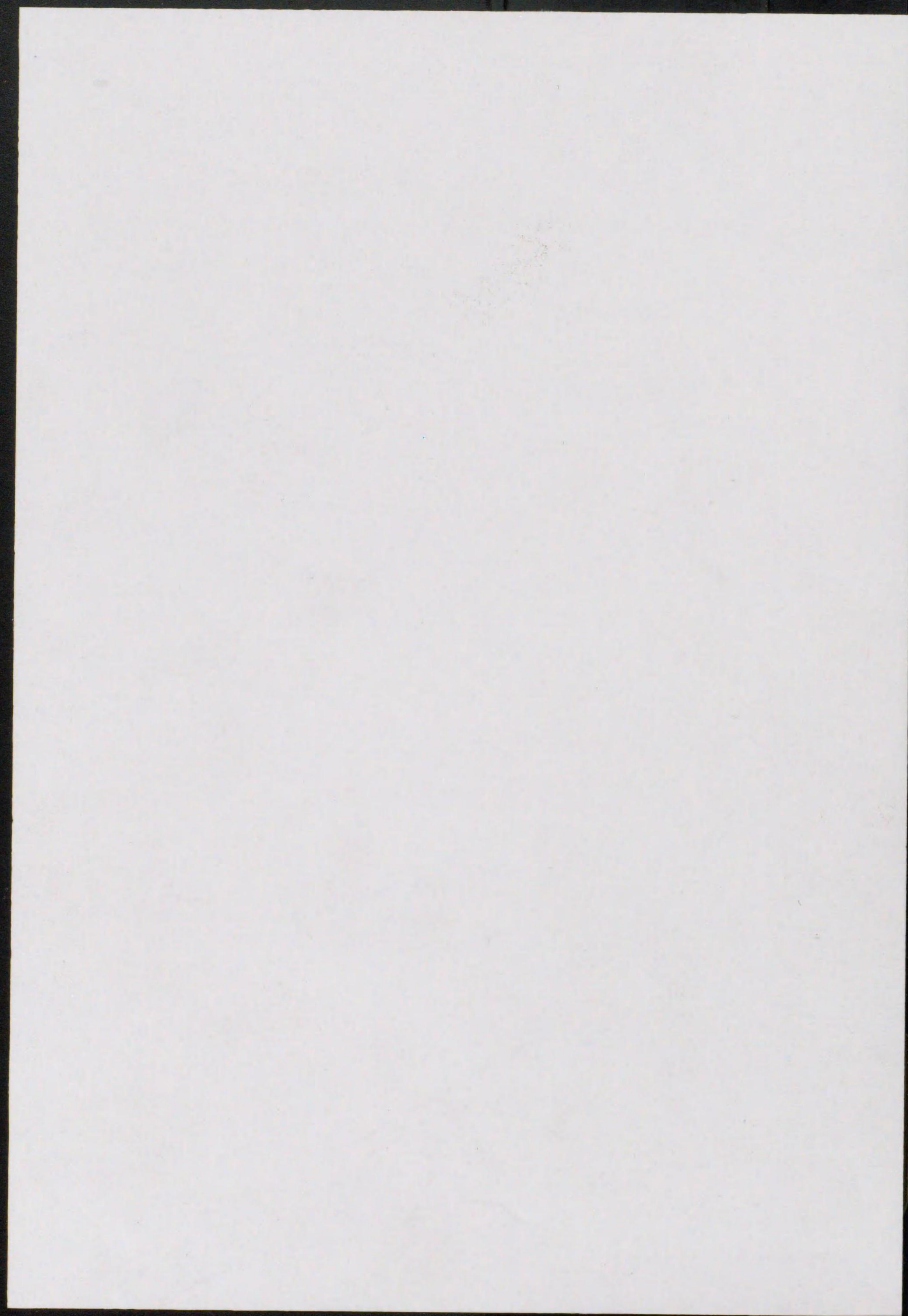
山邊習學著 二五〇・送一四
佛弟子傳

加藤咄堂著 一〇〇・送一〇
佛教とは何ぞや

613
37人

佛 教 研 究 法 境 野 黃 洋	佛 教 哲 學 椎 尾 辨 匡	佛 教 論 理 學 宇 井 伯 壽	佛 教 文 學 山 邊 習 學	佛 教 の 法 律 思 想 長 井 眞 琴 小 野 清 一 郎	佛 教 神 話 小 野 玄 妙	佛 教 教 育 學 羽 溪 了 諦	弘 法 大 師 の 思 想 と 宗 教 神 林 隆 淨	日 蓮 聖 人 の 思 想 と 宗 教 馬 田 行 啓	法 然 上 人 の 思 想 と 宗 教 前 田 聽 瑞	佛 弟 子 傳 山 邊 習 學	佛 教 と は 何 ぞ や 加 藤 咄 堂
送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送二 四〇	送一 〇〇
佛 教 讀 本 岡 本 か の 子	送 放 茶 根 譚 講 話 加 藤 咄 堂	全 釋 茶 根 譚 加 藤 咄 堂	送 放 十 牛 圖 講 話 勝 平 大 喜	送 放 碧 巖 集 講 話 日 種 讓 山	送 放 正 信 偈 講 話 大 谷 瑩 潤	送 放 開 目 鈔 講 話 馬 田 行 啓	宗 教 の 批 判 と 理 解 本 莊 可 宗	印 度 佛 跡 を 觀 る 翁 久 允	七 愚 集 蓮 沼 文 範	蓮 月 尼 蓮 沼 文 範	死 後 は ど う な る 加 藤 咄 堂
送三 三〇	送一 三〇	送一 三〇	送一 三〇	送一 三〇	送一 三〇	送一 〇〇	送一 〇〇	送一 三〇	送一 三〇	送一 三〇	送一 〇〇
<p style="text-align: center;">東大出版社 東京芝罘電 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話 芝罘電話</p>											



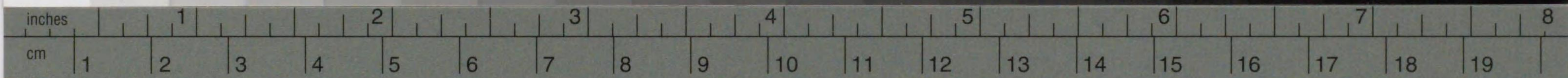


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

